羽根倉南遺跡

2022

本庄市教育委員会

羽根倉南遺跡
（はねくらみなみいせき）

2022

本庄市教育委員会

序

埼玉県北西部に位置する本庄市は、県指定史跡の「鷺山古墳」や「雉岡城跡」をはじめとして、旧石器時代から近世に至るまで数多くの遺跡が所在し、県下有数の遺跡の宝庫として知られています。当教育委員会では、これらの豊富な遺跡を守るべく様々な保護事業を進めるとともに、より多くの方々に親しまれるよう、書籍の刊行や本庄早稲田の杜ミュージアム等での公開・展示を行っております。

さて、本書では、そういった豊富な遺跡の１つであります羽根倉南遺跡における発掘調査の成果を報告いたします。

本遺跡の発掘調査は、平成５年度に実施されたもので、発掘調査範囲は道路幅程度と狭いものでありましたが、一方で検出された遺構・遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世と多岐に渡り、本地域が様々な時代で、多くの人々の生活を支えてきた土地であることが分かりました。

また、本遺跡では、大型の土器を棺として使用した土器棺墓という遺構が検出されています。この遺構は古墳時代のものと考えられておりますが、同時代の土器棺墓は児玉地域周辺では類例が少なく、当時の人々の葬制を考える上で重要な資料であります。

本書は、道路整備に先立って実施された発掘調査の成果をまとめたものでありますが、本市並びに児玉郡一帯の歴史を考える上で重要な資料の一つになるものと期待されます。また、本書が学術的な資料としてはもとより、市民の学びに結び付き、本市を含めた周辺地域の歴史や遺跡を理解する一助として、多くの方々に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、現地での発掘調査から整理・報告書の刊行にあたり、ご協力・ご教示を賜りました関係諸機関並びに関係者の皆様、発掘調査の際に便宜を図っていただいた地域の皆様に対しまして、心よりお礼を申し上げます。

令和４年３月

本庄市教育委員会
教育長　勝山　勉

例　言

1．本書は、埼玉県本庄市児玉町宮内字上ノ原 1287 番地外（埼玉県遺跡番号 54 － 280）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査の目的・調査期間・調査機関・調査担当は、以下の通りである。
　　調査目的　町道改良舗装工事　　調査期間　平成５年 11 月 17 日～平成６年１月 31 日
　　調査機関　児玉町教育委員会（当時）　調査担当　徳山　寿樹

3．発掘調査及び整理・報告書刊行に要した経費は、町費（当時）・市費である。

4．報告書刊行のための図面整理は本庄市教育委員会が行い、本書の執筆･編集は、大熊の協力のもと、福岡が行った。

5．基準点の測量データは、児玉町産業課（発掘調査当時）より提供を受け、出土遺物整理作業は、有限会社毛野考古学研究所（平成 29 ～令和元年度）に委託し、一部を恋河内が作成した。その他、図面の編集作業等は本庄市教育委員会が行った。また、石器の分類は有限会社毛野考古学研究所が行い、縄文土器の型式分類については、早稲田大学考古資料館学芸員　細田 勝氏にご教示いただいた。

6．本書に関する出土品・図面・デジタルデータ等の資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。

7．発掘調査及び本書作成に当たって、下記の方々、諸調査機関よりご助力・ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称省略）

池田　匡彦、井上　裕一、金子　彰男、北山　直人、中沢　良一、林　道義、丸山　修、細田　勝、有限会社毛野考古学研究所、児玉郡神川町教育委員会、児玉郡上里町教育委員会、児玉郡美里町教育委員会、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、早稲田大学考古資料館

8．本報告にかかる発掘調査、整理作業及び報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は下記の通りである。

羽根倉南遺跡発掘調査組織（平成５年度）

主体者	児玉町教育委員会	
	教育長	冨丘　文雄
事務局	児玉町教育委員会社会教育課	
	課　長	大塚　勲
	課長補佐	吉川　敏男
	係　長	清水　満
	主　任	田島　賢二
	主　事	倉林美恵子
	主　事	恋河内昭彦
担当者	主　任	鈴木　徳雄
	主　事	徳山　寿樹
	補助員等	尾内　俊彦
		村上　泰司
		大熊　季広

羽根倉南遺跡整理・報告書刊行組織（令和３年）

主体者	本庄市教育委員会	
	教　育　長	勝山　勉
事務局	事　務　局　長	高橋　利征
	文化財保護課	
	課　長	佐々木智恵
	課長補佐	細野　房保
	課長補佐	山田　修
	埋蔵文化財係長	大熊　季広
	主　査	的野　善行
	主　事	水野　真那
	主　事	福岡　佑斗
	主　事　補	松浦　誠
	専　門　員	徳山　寿樹
	会計年度任用職員	中嶋　淳子・矢内　勲
		新井　嘉人・栗原　正実
		倉林　美紀・渋谷　裕子
		星野八重子・落合智恵美
		黒澤　恵

凡　例

1．羽根倉南遺跡の遺構番号は、本報告書を作成するにあたり、遺構名称の整理を行い、新たに番号を振り直している。振り直しを行った遺構番号は以下の通りである。

旧番号	新番号
集 石 遺 構	第１号集石炉
第１０号土坑	第１号掘立柱建物跡（Ｐ－１）

2．本書所収の遺跡全測図・各遺構図における方位針は座標北を示す。方位針のない平面図は北が上である。

3．セクション図に示した数値は、第１図中「基準点 (B.M. ±０)」からの相対標高を示し、単位はcmである。なお、「基準点」付近の標高は約 151.8m である。

4．本報告書の本文・図中における各種遺構・遺物の略号は、下記の通りである。
SI ＝竪穴住居跡、SB ＝掘立柱建物跡、SF ＝竪穴状遺構、SL ＝集石炉、SK ＝土坑、ST ＝土器棺墓、P ＝ピット・柱穴

5．遺構実測図は、全測図を１／４００、炉・ピット・土器棺墓の平面図・断面図を１／３０、その他の遺構平面図・断面図を１／６０で掲載した。

6．遺構の規模は、上端での計測値を原則としている。

7．遺構断面図中のスクリーントーンは、地山（ローム層）を示す。

8．本文中や土層説明中で、As-A、浅間山系 A 軽石は、浅間山系噴出物 A テフラ (1783 年爆裂) を表す。

9．遺物観察表（石製品除く）における各項目の内容は、以下の通りである。
A －法量(単位はｃｍとする。カッコ内は推定値を示す)、B －成型、C －整形･調整、D －胎土･材質、E －色調、F －残存度、G －備考、H －出土地点

10. 遺物の実測図及び写真の縮尺は、土師器・須恵器１／４、縄文土器片・瓦片・石製品１／３を基本とし、一部、縮尺の異なるものについては、都度記載した。

11. 本報告書で使用した地図は下記の通りである。
図１：本庄市都市計画図　１／２５００　（平成 25 年度）
図３：国土交通省国土地理院　１／５０，０００　「高崎」（平成１０年度）

12. 発掘報告書等の参考文献は、文中では明示せず、シリーズ毎にまとめ、第Ⅳ章末に掲載した。

目　次

序

例言

凡例

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第1節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第2節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第Ⅲ章　羽根倉南遺跡の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第1節　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第2節　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第3節　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 8

第Ⅳ章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

参考文献

写真図版

報告書抄録

〈挿図目次〉

第 1 図　羽根倉南遺跡の包蔵地範囲と発掘調査地点
第 2 図　埼玉県の地形
第 3 図　羽根倉南遺跡と周辺遺跡
第 4 図　基本層序概略図
第 5 図　羽根倉南遺跡調査区全測図
第 6 図　第1a・b号住居跡平面・断面図
第 7 図　第1a号住居跡出土遺物図
第 8 図　第1b号住居跡出土遺物図
第 9 図　第1a・b号住居跡一括出土遺物図
第10図　第2a・b・c号住居跡平面・断面図
第11図　第2b号住居跡出土遺物図
第12図　第2c号住居跡出土遺物図
第13図　第3号住居跡平面・断面図
第14図　第3号住居跡出土遺物図
第15図　第4号住居跡平面・断面図
第16図　第5号住居跡平面・断面図
第17図　第5号住居跡出土遺物図
第18図　第6号住居跡・炉跡平面・断面図
第19図　第6号住居跡・埋甕平面・断面図
第20図　第6号住居跡・炉跡出土遺物図
第21図　第6号住居跡・埋甕出土遺物図
第22図　第7号住居跡平面・断面図
第23図　第7号住居跡出土遺物図
第24図　第8号住居跡平面・断面図
第25図　第8号住居跡出土遺物図1
第26図　第8号住居跡出土遺物図2
第27図　第9号住居跡平面・断面図
第28図　第10号住居跡平面・断面図
第29図　第11a・b号住居跡平面・断面図
第30図　第11a・b号住居跡出土遺物図
第31図　第1号掘立柱建物跡平面・断面図
第32図　第1号掘立柱建物跡出土遺物図
第33図　第1号竪穴状遺構平面・断面図
第34図　第1号竪穴状遺構出土遺物図
第35図　第1号集石炉平面図・断面図
第36図　第1～9号土坑平面・断面図
第37図　第1号土坑出土遺物図
第38図　第3号土坑出土遺物図
第39図　第7号土坑出土遺物図
第40図　第1号土器棺墓平面・断面図
第41図　第1号土器棺墓出土遺物
第42図　遺構外検出遺物図
第43図　石製品実測図1
第44図　石製品実測図2
第45図　石製品実測図3

〈表目次〉

第 1 表　第1a号住居跡出土遺物観察表
第 2 表　第1b号住居跡出土遺物観察表
第 3 表　第1a・b号住居跡一括出土遺物観察表
第 4 表　第2b号住居跡出土遺物観察表
第 5 表　第2c号住居跡出土遺物観察表
第 6 表　第3号住居跡出土遺物観察表
第 7 表　第5号住居跡出土遺物観察表
第 8 表　第6号住居跡・炉跡・埋甕出土遺物観察表
第 9 表　第6号住居跡埋甕出土遺物観察表
第１０表　第7号住居跡出土遺物観察表
第１１表　第8号住居跡出土遺物観察表
第１２表　第11a・b号住居跡出土遺物観察表
第１３表　第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表
第１４表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表
第１５表　第１～９号土坑観察表
第１６表　第１号土坑出土遺物観察表
第１７表　第３号土坑出土遺物観察表
第１８表　第７号土坑出土遺物観察表
第１９表　第１号土器棺墓出土遺物観察表
第２０表　遺構外出土遺物観察表
第２１表　石製品観察表

〈写真図版目次〉

写真図版 1　遺構写真 1 ：調査区１区
写真図版 2　遺構写真 2 ：調査区２区
写真図版 3　遺構写真 3 ：第１～２号住居跡
写真図版 4　遺構写真 4 ：第３～９号住居跡
写真図版 5　遺構写真 5 ：第９～11号住居跡、第１号掘立柱建物跡、第１号竪穴状遺構出土遺物、第１号土坑
写真図版 6　遺構写真 6 ：第２・５～８号土坑、第１号集石炉、第１号土器棺墓
写真図版 7　遺物写真 1 ：第 1a・b 号住居跡出土遺物
写真図版 8　遺物写真 2 ：第１a・1b・２b号住居跡出土遺物
写真図版 9　遺物写真 3 ：第２c・３号住居跡出土遺物
写真図版１０　遺物写真 4 ：第５・６号住居跡出土遺物
写真図版１１　遺物写真 5 ：第７・８号住居跡出土遺物
写真図版１２　遺物写真 6 ：第 11a・b 号住居跡、第１号掘立柱建物跡、第１号竪穴状遺構出土遺物
写真図版１３　遺物写真 7 ：第１・３・７号土坑出土遺物
写真図版１４　遺物写真 8 ：第１号土器棺墓出土遺物、遺構外出土遺物
写真図版１５　遺物写真 9 ：石製品１
写真図版１６　遺物写真１０：石製品２

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

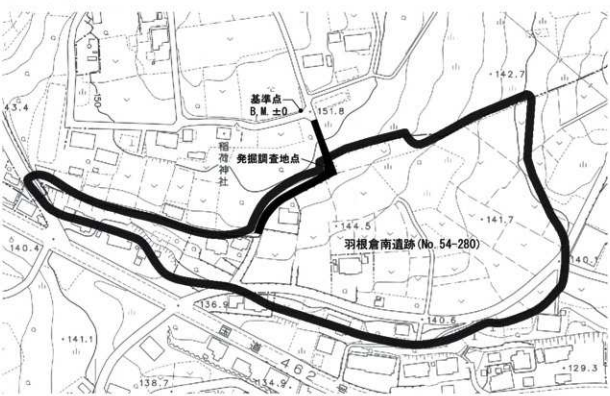
本報告に関わる発掘調査は、町道改良舗装工事に先立つ平成５年度埋蔵文化財保存事業として実施したものである。

開発予定地は、『埼玉県遺跡地図』（当時）に記載のある周知の埋蔵文化財包蔵地である羽根倉南遺跡（県遺跡 No.54-280）内に位置しており、縄文土器から中世瓦まで多数の土器片等が散布する地点であることが広く周知されていた。このため、本開発において、事業計画範囲のうち、埋蔵文化財に影響の及ぶと考えられる部分については、事前に記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査を実施するにあたっては、平成５年 11 月 16 日付け児産第 365 号で児玉町長　小柏儀一より、文化財保護法第 57 条の３第１項（当時）の規定による『埋蔵文化財発掘の通知について』が提出され、児玉町教育委員会は同通知を同年同日付けで埼玉県教育委員会教育長宛てに進達した。また、同年同日付け児教社第 225 号で進達に合わせて、児玉町教育委員会教育長より『埋蔵文化財発掘調査の通知について』が埼玉県教育委員会教育長宛てに提出された。埼玉県教育委員会からは、平成６年１月２５日付け教文第３－549 号で『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）』の通知があり、発掘調査は文化財保護法の趣旨に則り、適切に実施するように指示された。

現地における発掘調査は平成５年 11 月 17 日～平成６年１月 31 日の約２か月半の期間を要して実施された。

なお、本件発掘調査範囲について、当時からその一部が、児玉郡神川町に含まれることが認知されていたが、発掘調査当時に実施された児玉町教育委員会・神川町教育委員会間の協議により、児玉町が担当する道路工事分については、児玉町教育委員会が担当する旨の取り決めがなされ、前述の児教社第 225 号の「出土品処置」の項に、児玉町教育委員会が「報告書を刊行し、町教育委員会で保管する」と明記されている。本報告書は、当時の協議内容を受けて、本庄市教育委員会が報告・刊行するものである。



第１図　羽根倉南遺跡の範囲と調査地点

※本包蔵地範囲は令和２年度時点のものである。

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

本書で報告する羽根倉南遺跡の所在する本庄市は、埼玉県北西部に位置し、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市、東側は深谷市及び児玉郡美里町、南側は秩父郡皆野町及び長瀞町、西側は児玉郡神川町及び上里町と、それぞれ接している。また、平成 18(2006) 年に旧本庄市と旧児玉町が合併して、現在の本庄市となった。市域は、北部の利根川流域から南部の上武山地まで北東から南西方向に向かって伸び、その距離は約 20km を測る。

本庄市の地形は、南部の上武山地、山裾から児玉市街地にかけての児玉丘陵、児玉市街地から本庄市街地にかけての本庄台地、北部の利根川流域の低地からなる。

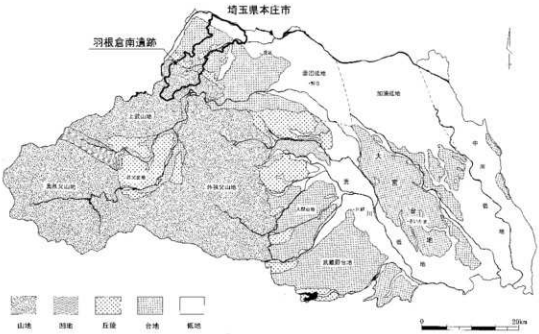
上武山地は秩父山系の北東部を構成する山地で、三波川変成帯の結晶片岩を基盤とし、平井断層によって北東部の児玉丘陵と区別される。

児玉丘陵は、上武山地裾部から北東方向に半島状に延びる丘陵であり、開析により複数の小支丘に分枝している。また、丘陵北東部からは、北東方向に第三系の独立丘である生野山丘陵、鷲山丘陵、大久保山丘陵が列点状に続いている。

本庄台地は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川の神流川扇状地と、前述の独立丘の東側を流れる小山川（旧見驯川）の見驯川扇状地からなる複合扇状地である。また、台地上には丘陵から流れる複数の中小河川が南西から北東方向に向かい流下しており、河川周辺の沖積化が進んでいる。

北部の低地は、利根川右岸に展開する利根川や烏川の氾濫原であり、台地とは児玉郡上里町金久保付近から本市鵜森にかけて形成された段丘崖（断層崖）により隔される。

さて、本書所収の羽根倉南遺跡は、児玉丘陵内にあり、JR 八高線児玉駅より西に約 4.1km、本庄市児玉文化会館（セルディ）より西に約 2.3km、武蔵国二宮金鑽神社（児玉郡神川町）より北東に約



第２図　埼玉県の地形

1.4km の地点に位置する。また、本遺跡は女堀川左岸に接して伸びる小支丘の南斜面に所在しており、南に約 200m 離れた女堀川に向けて傾斜している。

第２節　歴史的環境

本遺跡では、縄文時代から中世まで様々な時代の遺構・遺物が検出されている。本節では、本遺跡に関わる縄文時代から中世までを中心に、歴史的な流れを概観する。

当地域の縄文時代の初め、草創期における遺跡は独立丘を含む丘陵部や丘陵部縁辺を中心に発見されている。主な遺跡としては、爪形文土器等を伴う土坑が検出された長沖梅原遺跡（32）が知られるところであるが、他に秋山宿保田遺跡、宥勝寺北裏遺跡等の遺跡でも土器片が検出されている。

また、早期においては丘陵部裾から山地にかけて土器片が各地で検出されており、城ノ内遺跡（19）、葦池遺跡（36）、枇杷橋遺跡（28）、金屋南遺跡（33）、宮内上ノ原遺跡（３）、堂ノ入遺跡（47）、塔ノ入遺跡、杉ノ窟遺跡（児玉郡神川町）等で同時代の遺物が検出されている。

前期においても、主な生活圏は丘陵部であるが、前期中葉になると、数件の住居跡からなる本格的な集落が形成されるようになり、遺跡数も増加する。主な遺跡としては、宮内上ノ原遺跡、宇留井山遺跡（35）、塩谷下大塚遺跡（37）、神明前遺跡（43）、脊戸谷遺跡（48）、天田遺跡（４）等がある。また、橋ノ入遺跡や塔ノ入遺跡でも土器片が検出されており、山地においては尾根伝いに遺跡が分布する傾向がある。しかし、前期末葉以降、急速に遺跡数が減少し、秋山中山遺跡等で僅かに検出される程度になる。

続く中期においては、阿玉台式期から再び遺構・遺物の検出が認められるようになる。これまで集落域として、あまり利用されていなかった台地面にも本格的な集落が形成され、勝坂式終末期から加曾利ＥⅣ式期にかけては大規模な環状集落である将監塚遺跡（９）、古井戸遺跡（10）、新宮遺跡（15）が形成されている。また、加曾利ＥⅢ式期以降、これらの集落が拡散していき、周辺の低地部内の微高地・自然堤防上に平塚遺跡（13）や中下田遺跡（14）等の小規模集落が形成される。一方で、丘陵部や山地においても集落の形成は続いており、金屋南遺跡、倉林東遺跡（31）、塩谷平氏ノ宮遺跡（38）、本遺跡（１）、河内下ノ平遺跡、橋ノ入遺跡でも小規模な集落が営まれている。

しかし、後期以降、広く分布していた遺跡が急速に検出されなくなる。集落は旧河道や湧水点に接する微高地や台地内の低地部を中心に検出され、後期・晩期の遺跡としては、藤塚遺跡（12）、児玉清水遺跡（24）、吉田林女池遺跡（25）、古川端遺跡等が知られ、立地条件の変化から、生活形態の変化を予想させる（鈴木 1986）。

晩期末に入ると、再び山地や丘陵部へ移るようであるが、遺跡の検出は更に希薄となり、小規模な生活痕跡が点在するのみとなる。以降、弥生時代中期に至るまで、集落の痕跡は希薄になる。

弥生時代中期に入ると、児玉清水遺跡、塔ノ入遺跡、秋山塚原遺跡等で土器片が検出されはじめ、次第に遺物の検出が認められるようになる。

弥生時代後期に入ると、独立丘を含む丘陵部から丘陵部縁辺を中心に遺跡が検出されるようになる。主な遺跡としては、塩谷下大塚遺跡、塩谷平氏ノ宮遺跡、真鏡寺後遺跡（40）、下原北遺跡（41）、高柳原遺跡（34）、本遺跡、前組羽根倉遺跡（児玉郡神川町）（２）、生野山遺跡（21）、大久保山遺跡等がある。この時期の集落の多くは立地環境や検出状況から、比較的小規模な谷田経営を基盤とする小規模なものであったと考えられている（恋河内 1992）。また、この頃から、墓域の形成も認められ、後期から終末期にかけて塩谷下大塚遺跡、前組羽根倉遺跡、生野山遺跡等で、方形周溝墓が検出されている。

古墳時代前期に入ると、女堀川の下流域から中流域に向けて、灌漑技術を有する新たな人々の移住が認められ、自然堤防や微高地、独立丘縁辺の低地部を中心に、女堀川中下流域の大規模な開拓が進められていく。

代表的な遺跡として、中流域の大規模集落である川越田遺跡（6）、後張遺跡（5）が挙げられる。これらの遺跡は女堀川中流域の低地部にあって、畿内・東海・南関東等に系譜をもつ外来系の土器を有する大規模な集落を形成しており、開発を推し進めている集団が新たな技術・文物を携えて流入してきていたことが確認できる。また、生野山・大久保山丘陵上に方形周溝墓、鷲山丘陵上に前方後方墳である鷲山古墳（18）が築造され、集落の後背地や丘陵部の墓域としての役割が明確化していく。

一方で、上流域においては、生活圏の広がりはあるものの、弥生時代後期の集落域、耕作地、墓域、土器文様といった従来の要素を継承する小規模な集落が営まれており（鈴木 2000）、中下流域の急速な変質とは異なった様相を示している。主な遺跡としては、倉林後遺跡（30）、塩谷平氏ノ宮遺跡、宮内上ノ原遺跡、新羽根倉遺跡（児玉郡神川町）（49）、前組羽根倉遺跡等が挙げられる。

中・後期には更に女堀川流域の低地開発が進み、低地部では前期から継続する後張遺跡や今井川越田遺跡（7）のような大規模な集落が展開する。また、カマドの導入が進み、夏目遺跡・夏目西遺跡等では、畿内系・朝鮮半島系に属する在地産の土器や鍛冶関連、玉作関連の遺物も認められるようになる。

この時期になると、上流域の丘陵部でも集落の開発が進み、遺跡数が増加し規模も拡大する。大規模集落としては、ミカド遺跡（27）が知られ、他に倉林後遺跡、念仏塚遺跡（29）、塩谷下大塚遺跡、下原北遺跡、下原南遺跡（42）、真鏡寺後遺跡等で住居跡が検出されている。

また、小山川、女堀川流域において、独立丘を含む丘陵上を中心に古墳群が形成され、小山川流域には長沖古墳群（c）、秋山古墳群（b）、広本大町古墳群（e）、下町古墳群（d）、生野山古墳群（a）、女堀川流域では小規模であるが宮内古墳群（g）、飯倉古墳群（f）が造営される。

7世紀中頃になると、女堀川・小山川流域では集落の大規模な再編成が行われ、東牧西分遺跡（8）等一部の集落を除き、各地に形成されていた多くの集落は縮小・移転し、本庄台地上の大規模集落、独立丘含む丘陵部から丘陵部縁辺に点在する中小規模集落に整理されていく。

また、真下境東遺跡（17）等で検出された「真下大溝」や十二天遺跡（26）の「田端大溝」等、大規模な灌漑用水が開削され、児玉条里遺跡（j）や金屋条里遺跡（i）、今井条里遺跡（k）等の条里水田が整備されていく。

この時期の集落としては、南共和遺跡（11）、辻ノ内遺跡（16）、真下境東遺跡、古井戸・将監塚遺跡、皂樹原・檜下遺跡（児玉郡神川町・上里町）（50）等があるが、とりわけ、古井戸・将監塚遺跡や皂樹原・檜下遺跡等は前述の灌漑用水と相互的な関係性をもつ「計画的集落」（鈴木 1991,1997）として注目される。

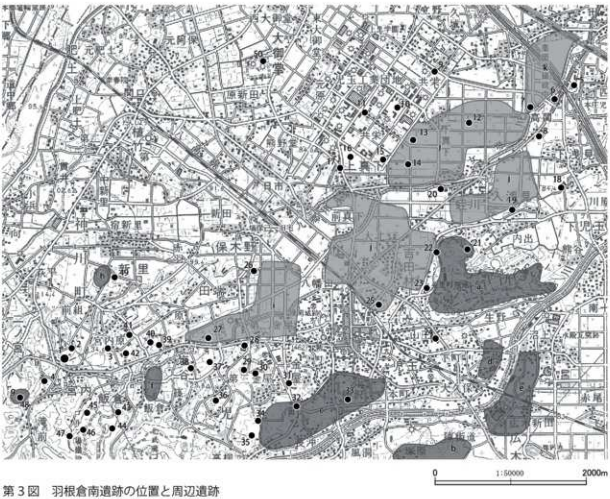
また、児玉丘陵山崎支谷において、丘陵部の谷地形を利用して、生産遺跡である児玉窯跡群が形成され、飯倉窯跡（44）、金草窯跡（46）等で須恵器窯・瓦陶兼業窯、小規模な製鉄遺構が検出されている。また、同生産遺跡群内にある山崎上ノ南遺跡（45）では宝亀2年銘木簡が検出されている。

しかし、平安時代の9世紀後半になると、条里制の影響が弱まり、条里施行範囲に留まらない集落の拡散が見られる。10 世紀頃には大規模集落の解体が進み、集落の再編成が行われ、前代から続く中小規模集落の他、新たに小規模集落が形成される。主な遺跡として、大久保山遺跡、雷電下遺跡、ミカド遺跡、吉田林割山遺跡（22）、阿知越遺跡（23）、枇杷橋遺跡、天田遺跡等がある。

11 世紀に入ると、生活様式の変化により、遺構・遺物の検出が極端に減少する。また、蛭川坊田

遺跡（20）等で直線的な溝により区画された屋敷地が検出されるようになり、中世的な集落構造への移行がみられる。

平安時代末期から中世初期には、児玉党塩谷氏の居館跡と推定される中世前半期の方形館である真鏡寺館跡（39）の形成が認められる等、各地で児玉党等の武士に関わる遺構・遺物が検出されるようになっていく。



第３図　羽根倉南遺跡の位置と周辺遺跡

１．羽根倉南遺跡、２．前組羽根倉遺跡、３．宮内上ノ原遺跡、４．天田遺跡、５．後張遺跡、６．川越田遺跡、７．今井川越田遺跡、８．東牧西遺跡、９．将監塚遺跡、10．古井戸遺跡、11．南共和遺跡、12．藤塚遺跡、13．平塚遺跡、14．中下田遺跡、15．新宮遺跡 、16．辻ノ内遺跡、17．真下境東遺跡、18．鷺山古墳、19．城ノ内遺跡、20．蛭川坊田遺跡、21．生野山遺跡、22．吉田林割山遺跡、23．阿知越遺跡、24．児玉清水遺跡、25．吉田林女池遺跡、26．十二天遺跡、27．ミカド遺跡、28．枇杷橋遺跡、29．念仏塚遺跡、30．倉林後遺跡、31．倉林東遺跡、32．長沖梅原遺跡、33．金屋南遺跡、34．高柳原遺跡、35．宇留井山遺跡、36．葦池遺跡、37．塩谷下大塚遺跡、38．塩谷平氏ノ宮遺跡、39．真鏡寺館跡、40．真鏡寺後遺跡、41．下原北遺跡、42．下原南遺跡、43．神明前遺跡、44．飯倉窯跡、45．山崎上ノ南遺跡、46．金草窯跡、47．堂ノ入遺跡、48．脊戸谷遺跡、49．新羽根倉遺跡、50．皂樹原・檜下遺跡、a．生野山古墳群、b．秋山古墳群、c．長沖古墳群、d．下町古墳群、e．広木大町古墳群、f．飯倉古墳群、g.宮内古墳群、h．白岩古墳群、i．金屋条里遺跡、j．児玉条里遺跡、k．今井条里遺跡

第Ⅲ章　羽根倉南遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

本遺跡は、本庄市児玉町宮内に所在し、上武山地から伸びる児玉丘陵の一支谷（宮内支谷）、標高140 ～ 152m 付近のやや急な斜面地に立地している。遺跡は、縄文時代中期の集落を主体とするが、弥生時代後期末葉から古墳時代の集落、平安時代前半期の集落も含む。

本遺跡の発掘調査は、平成５年に町道改良工事に先立つ遺跡の記録保存のための調査として実施された。本地点は、発掘調査以前より道路として利用されてきた地点であるため、調査区全域にわたり、近現代の道路及び溝跡による削平を受けており、遺構の上部が失われているものが多い。調査区は、北半部を１区、南半部を２区としており、１区は急傾斜地であるのに対し、２区は等高線に沿った緩やかな傾斜地である。

さて、本発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡 15 軒、掘立柱建物跡１棟、竪穴状遺構１基、集石炉１基、土坑９基、土器棺墓１基である。

竪穴住居跡は、縄文時代中期を中心とする住居跡が９軒（SI － 1a・b、2a ～ c、3、6、11a・b）、弥生時代後期末葉から古墳時代の住居跡が４軒（SI － 4・5・7・9）、平安時代前半期が１軒（SI － 8）、時期不明が１軒（SI － 10）であり、縄文時代中期を中心としつつも、多様な時代の住居跡が検出されている。

掘立柱建物跡（SB － 1 ）と竪穴状遺構（SF － 1 ）は、ともに覆土中に縄文土器を含むものの、明確な遺構との共伴関係を示す遺物が検出されていないため、時期は不詳である。

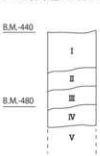
集石炉（SL － 1）は縄文土器を伴う焼けた礫石群と、これに付随するピット１基からなる遺構である。覆土の状況から、本来は縄文時代の住居内に所在した炉であった可能性が高い。

土坑（SK － 1 ～ 9 ）は、覆土中に縄文土器を含むものも認められるが、明確な遺構との共伴関係を示す遺物は検出されておらず、性格や時期の決め手に欠けるため、時期は不詳である。

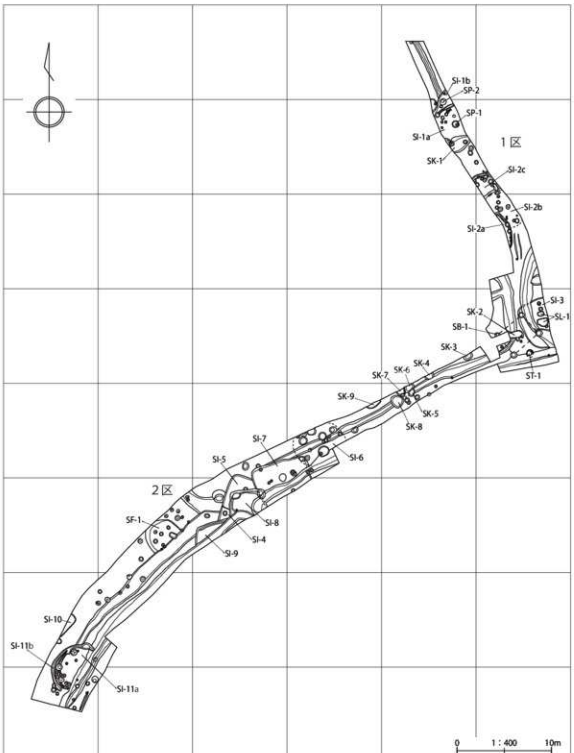
土器棺墓（ST － 1）は、大型壺を棺として利用して埋納した墓壙である。大型壺の年代観から、この遺構の時期は古墳時代中期に比定される。

第２節　基本層序

本調査区は、丘陵の南斜面地に位置し、北端から南端まで凡そ４m程度の標高差がある。そのため、本来であれば、複数箇所で基本層序を確認すべきところであるが、前述の通り、本調査区の大部分が、遺構確認面直上まで削平を受けており、基本層序を確認することは困難であった。これらのことから、本調査区における基本層序は、２区で比較的残りの良い SI － 10 周辺を基準に概略図として作成した。第Ⅰ層は As-A を含む灰褐色土層、第Ⅰ′層は近世～近代の道路面、第Ⅱ層の明褐色土層は近世までの耕作土層であり、調査区全体で認められる。第Ⅲ層の茶褐色土層は近世以前の耕作層であり、縄文土器片を含む。この層は、１区斜面地では流失した、または削平されており、ほぼ検出されず、傾斜の緩い２区を中心に堆積している。また、第Ⅳ層はロームブロックを含む褐色土層でローム層との漸移層であり、第Ⅴ層はハードローム層である。



第４図　基本層序概略図



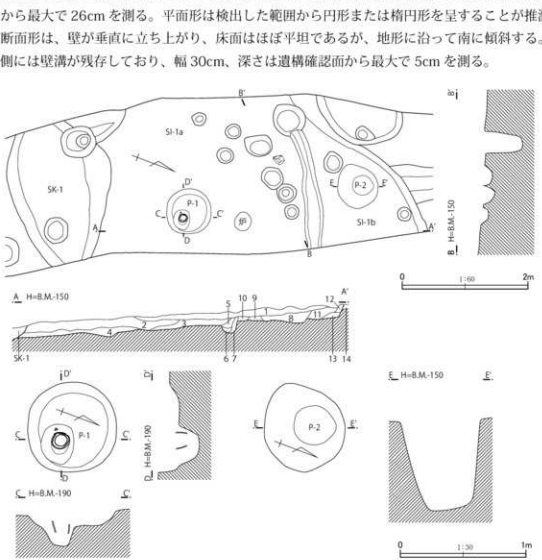
第５図　羽根倉南遺跡調査区全測図

第３節　検出された遺構と遺物

１．竪穴住居跡

第１a号住居跡（第６・７・９図、写真図版３・７・８）

調査区１区の北部に位置し、第１b号住居跡を切り、南側端部を第１号土坑に切られる。また、遺構の東側端部及び西側端部は調査区外である。規模は南北方向で最大3.34mを測り、深さは遺構確認面から最大で26cmを測る。平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推測される。断面形は、壁が垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南に傾斜する。住居跡北側には壁溝が残存しており、幅30cm、深さは遺構確認面から最大で5cmを測る。



第１a・b号住居跡土層説明

第１層	明黒褐色土	白色粒子を微量に含み、炭化物粒を極少量含む。しまり・粘性ともにあり。
第２層	暗茶褐色土	白色粒子・炭化物粒・ローム粒を少量均一に含む。しまりあり、粘性弱い。
第３層	暗茶褐色土	白色粒子・炭化物粒を少量含み、焼土粒・ローム粒を微量に含む。硬くしまり、粘性弱い。
第４層	明黒褐色土	炭化物粒・ローム粒・ローム小ブロックを均一に含む。硬質で粘性あり。
第５層	暗茶褐色土	ローム粒・ローム小ブロックを多量に含み、白色粒子・炭化物粒を微量に含む。しまりあり、粘性弱い。
第６層	暗褐色土	炭化物粒を均一に含み、ローム粒を少量含む。しまり・粘性ともに弱い。
第７層	明茶褐色土	風化ローム主体の層。黒色土を斑点状に含む。しまり・粘性ともに弱い。
第８層	暗茶褐色土	炭化物粒を均一に含み、ロームブロックを少量含む。しまり・粘性ともに弱い。
第９層	黄褐色土	ローム主体の層。
第10層	暗茶褐色土	白色粒子・ローム粒を少量含む。しまり・粘性ともに弱い。
第11層	褐色土	ローム粒を均一に含み、白色粒子・炭化物粒を微量に含む。しまりあり、粘性弱い。
第12層	暗褐色土	白色粒子・ローム粒を少量均一に含む。しまりあり、粘性弱い。
第13層	明褐色土	風化ローム主体の層。炭化物粒を含む。一部に硬化面がある。しまり弱、粘性なし。
第14層	暗茶褐色土	白色粒子・炭化物粒・ローム粒を少量均一に含む。しまりあり、粘性弱い。

第６図　第１a・b号住居跡平面・断面図

また、ピット（P－1）が1基検出されており、住居跡の中央部やや北東側に位置する。規模は70～73cm、円形を呈している。南東部には幅33cmの円形の掘り込みがあり、縄文土器（第7図9）が据えられていた。深さは、第1a号住居跡床面から上段で12cm、下段で27cmの深さを測る。

本遺構に伴う炉は地床炉であり、遺構中央やや北側に位置し、長軸30cm、短軸26cmを測る楕円形を呈している。

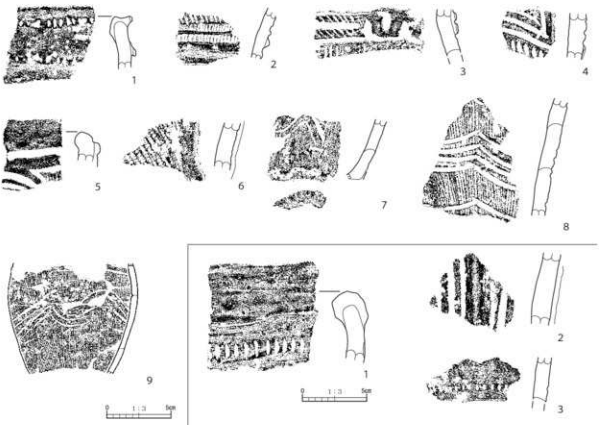
出土遺物は、縄文土器で、住居跡覆土中からは、諸磯b式、勝坂式、加曽利EⅡ式、曽利式、連弧文土器が検出されている。また、P－1より加曽利EⅡ式新段階の連弧文土器（第7図9）が検出されている。本遺構の時期は、遺物の検出状況から縄文時代中期の勝坂式終末期から加曽利EⅡ式新段階と推定される。

第1b号住居跡（第6・8・9図、写真図版3・7・8）

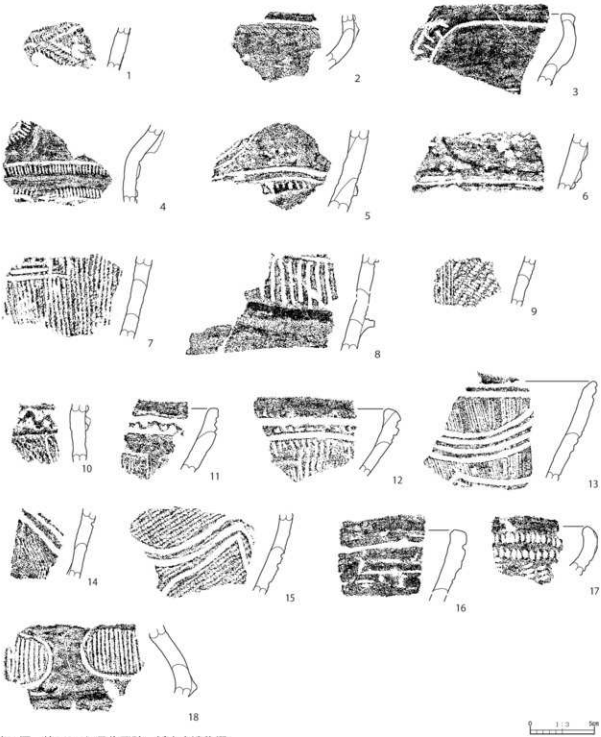
調査区1区の北部に位置し、南半部を第1a号住居跡に切られる。また、遺構の東側端部及び西側端部は調査区外である。規模は南北方向で最大1.62mを測り、深さは遺構確認面から最大で22cmを測る。平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推定される。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南にやや傾斜する。

また、ピットが1基(P－2)検出されており、住居跡の北側に位置する。規模は65～74cm、深さは、第1b号住居跡床面から70cmを測り、円形を呈している。

出土遺物は、縄文土器で、覆土中から、勝坂式、曽利式等が検出されている。ただし、第1a号住居跡の遺物と区別することは困難である。本遺構の時期は、第1a号住居跡との重複関係及び出土遺物から縄文時代中期中葉から後葉と推定される。



第7図　第1a号住居跡出土遺物図　第8図　第1b号住居跡出土遺物図



第９図　第１a・b 号住居跡一括出土遺物図

第１表　第１a 号住居跡　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部肥厚。口縁端部に刻み（丸棒状工具）。内面、ナデ。D．雲母、白色粒、黒色粒。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．口縁部破片。H．1a 住炉覆土。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線文。隆線脇に角押文を施文。内面、ナデ。D．雲母、白色粒。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．1a 住。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、頸部に隆帯区画。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。内面、ナデ。D．白色粒、石英、角閃石。E．内面 - 橙色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．炉覆土。

4	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯による渦巻文。隆帯脇に並行沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．1a 住。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 2.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に撚糸文 L を縦位施文。口縁部に隆帯文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母。E．内外面 - 橙色。F．口縁部破片。H．1a 住。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節 R L 縄文を横位施文。胴部に隆線文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - 明赤褐色。F．胴部破片。H．炉覆土。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に条線文（8 条以上の櫛歯状工具）を縦位施文。2 条の並行沈線（丸棒状工具）による弧線文。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母。E．内外面 - 橙色。F．底部破片。H．1a 住炉覆土。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高 9.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に条線文（8 条以上の櫛歯状工具）を施文。胴部に 4 条の並行沈線（丸棒状工具）による弧線文。爆ぜ。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母。E．内外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 P-1。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高 11.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、櫛歯状工具を用いた縦位沈線文を施文。半截竹管状工具を用いた 4 条の平行沈線による波状文を施文。内面、器面摩耗。ナデか。D．石英、白色粒、黒色粒、角閃石。E．内外面 - にぶい黄橙。F．胴部 3/4。H．P-1。

第 2 表　第 1 b 号住居跡　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。内面、ナデ、爆ぜ。D．雲母、片岩、白色粒。E．内面 - 明赤褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。H．1b 住。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線文及び隆曲線文（半截竹管状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - 褐灰色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 P-2。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に爪形文（棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．1 区 P-2。

第 3 表　第 1 a・b 号住居跡一括　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に浮線文。内面、ナデ。D．片岩、黒色粒、白色粒。E．内面 - 褐灰色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯による横位区画。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。内面、ナデ。D．白色粒、チャート、角閃石。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯による区画。隆帯上に刻み（棒状工具）。内面、ナデ。D．片岩、白色粒。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。H．1 区 1 住。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯による渦巻文。頸部に隆帯による区画。胴部に隆帯による楕円区画文。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。内面、ナデ。D．片岩、白色粒、黒色粒、角閃石。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯。隆帯上に刻み（半截竹管状工具）。隆帯脇に平行沈線（同工具）を施文。内面、ナデ、爆ぜ。D．片岩、白色粒、黒色粒。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線による楕円区画。区画内に波状文を施文（棒状工具）。内面、ナデ、爆ぜ。D．雲母、黒色粒、白色粒。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に撚糸文 R を縦位施文。胴部に並行沈線（丸棒状工具）を横位施文。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、雲母、角閃石。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - 明赤褐色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高 7.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯による区画。区画内に短沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、チャート。E．内外面 - 橙色。F．口縁部破片。H．1 区 1 住。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節 L R 縄文を横位施文。平行沈線（半截竹管状工具）による懸垂文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - 褐灰色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
10	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に撚糸文 L を縦位施文。頸部に細隆帯貼付。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、角閃石。E．内外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 1 住。
11	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に平行沈線（半截竹管状工具）。沈線間交互刺突（丸棒状工具先端）による波状文を施文。胴部縦位沈線文（半截竹管状工具）。内面、ナデ。D．白色粒、雲母。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい橙色。F．口縁部破片。H．1 区 1 住。

12	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に燃糸文Ｌを縦位施文。口縁部に２条の平行沈線（半截竹管状工具）を横位施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。H．１区１住。
13	縄文土器 深鉢	A．残存高 7.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に条線文（８条以上の櫛歯状工具）を縦位施文。口縁部に２条の並行沈線（棒状工具）による横位沈線。胴部に４条の並行沈線（同工具）による弧線文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩、チャート、角閃石。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい黄橙色。F．口縁部破片。H．１区１住。
14	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に条線文（６条以上の櫛歯状工具）を縦位施文。胴部に２条の並行沈線（丸棒状工具）による斜行文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、石英。E．内面 - 明赤褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．１区１住。
15	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。胴部に３条の沈線（丸棒状工具）による弧線文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 灰褐色。F．胴部破片。H．１区１住。
16	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部短沈線（丸棒状工具）による横位区画。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、角閃石。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．口縁部破片。H．１区１住。
17	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に４列の爪形文を横位施文。胴部に２列の爪形文を縦位施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、石英、黒色粒。E．内外面 - にぶい橙色。F．口縁部破片。H．１区１住。
18	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯区画（ハガレ）。区画内短沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母。E．内外面 - 橙色。F．口縁部破片。H．１区１住。

第２a 号住居跡（第 10 図、写真図版３）

調査区１区の中央部に位置し、第 2b 号住居跡を切る。また、遺構の西側大部分は調査区外である。規模は北西から南東方向で最大 3.24m を測り、深さは遺構確認面から最大で 18cm を測る。平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推定される。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南にやや傾斜する。住居跡南側には壁溝が残存しており、幅 30cm、深さは床面から最大で 19cm を測る。

出土遺物は、覆土中に含まれた縄文土器片である。本遺構の時期は、第 2b 号住居跡との重複関係及び出土遺物から、縄文時代中期中葉から後葉と推定される。

第 2b 号住居跡（第 10・11 図、写真図版３・８）

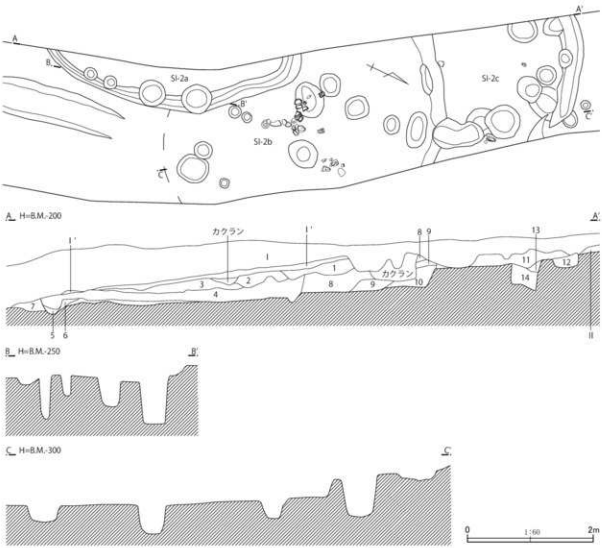
調査区１区の中央部に位置し、第 2c 号住居跡を切り、南西部を第２a 号住居跡に切られ、南東部を近現代の道路に削平されている。また、遺構の東側端部及び西側端部は調査区外である。規模は北西から南東方向で最大 4.50m を測り、深さは遺構確認面から最大で 33cm を測る。平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推定される。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南にやや傾斜する。

出土遺物は、縄文土器で、勝坂式終末期、加曽利ＥⅡ式、僅かに焼町式が検出されている。本遺構の時期は、遺物の出土状況から、縄文時代中期の勝坂式終末期から加曽利ＥⅡ式の段階と推定される。

第 2c 号住居跡（第 10・12 図、写真図版９）

調査区１区の中央部に位置し、南半部を第 2b 号住居跡に切られる。また、遺構の東側端部及び西側端部は調査区外である。規模は北西から南東方向で最大 2.40m を測り、深さは遺構確認面から最大で 15cm を測る。平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推定される。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って僅かに南に傾斜する。住居跡北側では壁溝が確認でき、幅 38cm、深さは床面から最大で 14cm を測る。

出土遺物は、縄文土器で、阿玉台Ⅱ式、勝坂式、加曽利ＥⅡ式、曽利式が検出されている。本遺構の時期は、遺物の検出状況から、縄文時代中期の勝坂式終末期から加曽利ＥⅡ式の段階と推定される。

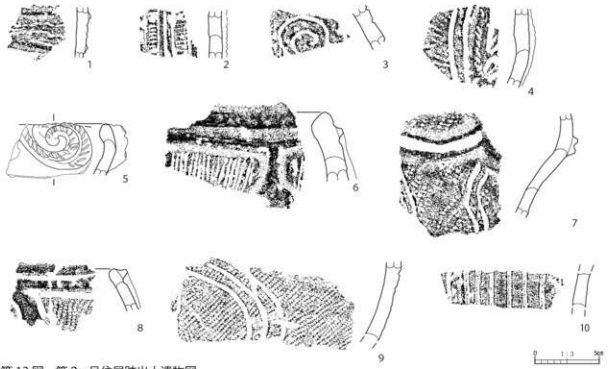


第２a・b・c 号住居跡土層説明

第１層	暗茶褐色土	ローム粒子(～0.1mm)を微量に含む。しまり若干あり・粘性なし。
第２層	明褐色土	ローム粒子(～0.1mm)と暗褐色土が混じる。軽石・炭化物をほとんど含まない。しまりはあまりなくフカフカしており、粘性なし。
第３層	明褐色土	第2層に類似する。軽石を微量に含む。しまり若干あり・粘性なし。
第４層	暗褐色土	ブロック状のローム粒子(～0.1mm)と暗褐色土が混じる。軽石(～0.8mm)・炭化物を少量含む。しまりあり(第3層より硬い)・粘性なし。
第５層	明褐色土	ローム主体で暗褐色土を少量含む。しまりあり(第4層より硬い)・粘性あり。
第６層	明褐色土	ローム主体で暗褐色土を少量含む。しまりあり(第5層より硬い)・粘性あり(第5層よりやや弱い)。
第７層	明褐色土	第6層に類似するが、暗褐色土が更に多い。
第８層	暗褐色土	ローム粒子(～0.1mm)を少量含み、黒褐色土がブロック状に混じる。軽石(～0.5mm)・炭化物粒子(～0.8mm)を少量含む。しまりは硬くガリガリしている。粘性なし。
第９層	暗褐色土	ローム粒子(～0.1mm)が若干多い。黒褐色土がブロック状に混じる。軽石(～0.5mm)・炭化物粒子(～0.8mm)を少量含む。しまりは硬くガリガリしている。粘性なし。
第10層	明褐色土	第９層よりローム粒子(～0.1mm)を多く含み、ローム小ブロック(～2mm)を少量含む。黒褐色土がブロック状に混じる。軽石(～0.5mm)・炭化物粒子(～0.8mm)を少量含む。しまりは硬くガリガリしている。粘性なし。
第11層	暗褐色土	一部に暗褐色土塊を含みガリガリしている。ローム粒子(0.5～2mm)を少量含み、軽石(0.5mm)を微量に含む。しまり若干あり・粘性弱い。
第12層	暗褐色土	第11層に類似するがローム粒子(0.5～2mm)が若干多い。硬くしまっており、粘性は弱い。
第13層	暗褐色土	第11層に類似するがローム粒子(0.5～2mm)が第12層より更に多い。硬くしまっており(第12層程度)、粘性若干あり。
第14層	明褐色土	ローム粒子(～0.1mm)主体で、黒褐色土が少量入る。第13層に似る。硬くしまっており(第13層より硬い)、粘性若干あり。

第 10 図　第２a・b・c 号住居跡平面・断面図

第 11 図　第 2 b 号住居跡出土遺物図



第 12 図　第２c 号住居跡出土遺物図

第４表　第２b 号住居跡　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．復元口径（23.2）．残存高 14.1。B．粘土紐積み上げ．C．外面、平縁口縁。口唇部肥厚。体部に単節R縄文を縦位施文。横位隆帯とＳ字状隆帯を貼付け後、横位隆帯上面を押圧、Ｓ字状隆帯上面に竹管状工具による２条の沈線を施文。隆帯を横断する単沈線を交互施文。内面、ナデ。D．チャート、黒色粒、灰色粒。E．内面 - 明赤褐。外面 - 橙。F．口縁部～胴部 1/5。H．フク土。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 11.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部突起。上面・側面・正面に円環を有する。円環の周縁に隆帯を貼付け。周縁と隆帯脇に丸棒状工具による単沈線を沿わせる。内面、ナデ。D．石英、黒色粒、片岩、白色粒。E．内外面 - 明赤褐。F．突起のみ残存。H．2b 住。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、隆帯による文様表出。隆帯上に刻み(ヘラ状工具)。円文(環状工具）を施文。内面､隆帯による文様表出。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。ナデ。D．白色粒、雲母、角閃石、黒色粒。E．内面 - 橙色、外面 - にぶい橙色。F．口縁部把手破片。H．I 区 2b 住。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.8。B．粘土紐積み上げ。C．外内面ともに突起端部に刻み(ヘラ状工具）と沈線文(丸棒状工具)を施文。D．白色粒、雲母。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部把手破片。H．I 区 2b 住。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 8.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。口縁部に平行沈線文（半截竹管状工具）と渦巻状貼付文。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、石英、雲母、角閃石。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - 明赤褐色。F．口縁部破片。H．I 区 2b 住。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高 7.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を縦位施文。口縁部に並行沈線（丸棒状工具）による区画。区画内に三叉文（丸棒状工具）。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、石英。E．内面 - にぶい赤褐色、外面 - 褐灰色。F．口縁部破片。H．I 区 2b 住。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。口縁部に隆帯下端区画。隆帯上に刻み（丸棒状工具)。区画内沈線文（丸棒状工具)。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。G．８と同一個体。H．I 区 2b 住覆土。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯下端区画。隆帯上に刻み（丸棒状工具)。区画内に渦巻文（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。G．７と同一個体。H．I 区 2b 住覆土。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.6。B．粘土紐積み上げ。C．波状口縁。外内面､口縁端部に横位沈線文（丸棒状工具）を施文。爆ぜ。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - 灰褐色、外面 - 黒褐色。F．口縁部破片。H．I 区 2b 住。
10	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面､地文に撚糸文(原体不明)を縦位施文。隆帯による横Ｓ字文。区画内に横位沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、チャート、角閃石。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．I 区 2b 住覆土。

11	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。口縁部隆帯による下端区画。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。平行沈線（半截竹管状工具）による区画文。区画内に爪形文（半截竹管状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内面 - 灰褐色、外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．1 区 2b 住。
12	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。胴部に隆帯による渦巻文。隆帯脇に並行沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、石英。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．1 区 2b 住覆土。
13	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に曲隆線文。内面、ナデ。D．白色粒、石英。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．1 区 2b 住覆土。
14	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。口縁部に隆帯文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、雲母、角閃石。E．内面 - 橙色、外面 - 暗褐色。F．口縁部破片。H．1 区 2b 住覆土。
15	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。口縁部に隆帯による渦巻文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母。E．内面 - 褐灰色、外面 - 灰黄褐色。F．口縁部破片。H．1 区 2b 住。
16	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。胴部に隆帯による懸垂文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、黒色粒。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．1 区 2b 住。
17	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、頸部に隆帯区画。隆帯上に刻み（丸棒状工具）。胴部沈線（同工具）による懸垂文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、黒色粒。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 灰黄褐色。F．胴部破片。H．1 区 2b 住。

第５表　第２c 号住居跡　出土遺物観察表

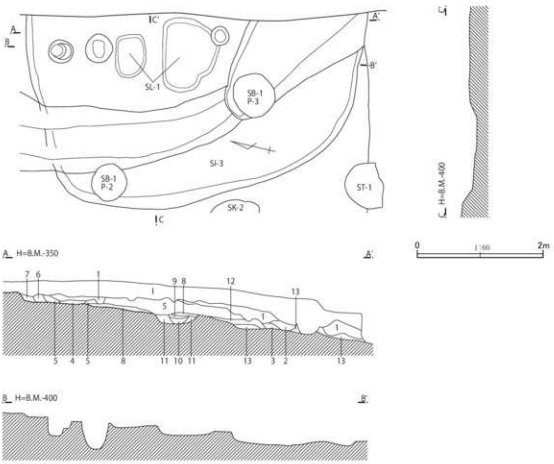
1	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線による区画。区画内に三角押文（尖頭状工具）を施文。内面、ナデ。D．雲母、チャート、黒色粒。E．内外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に平行沈線（半截竹管状工具）によるパネル文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - 明赤褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。胴部に単沈線（丸棒状工具）による渦巻文。文様内磨消。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - 赤褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に無節Ｌ縄文を縦位施文。胴部に隆帯による懸垂文。隆帯上に無節Ｌ縄文を縦位施文。隆帯脇に並行沈線（丸棒状工具）。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、片岩。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - 明赤褐色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯による渦巻文。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩、角閃石。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい橙色。F．口縁部突起破片。H．2c 住覆土。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に撚糸文Ｌを縦位施文。口縁部に隆帯による区画。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、角閃石。E．内面 - 褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。H．2c 住覆土。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高 8.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。口縁部に隆帯による隆帯文。胴部に並行沈線（丸棒状工具）による懸垂文。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - 明赤褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。口縁部に隆帯文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、石英。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - 灰黄褐色。F．口縁部破片。H．2c 住覆土。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。胴部に３条一組の並行沈線（丸棒状工具）による弧線文。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、片岩。E．内面 - にぶい橙色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。
10	縄文土器 深鉢	A．残存高 2.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、多条沈線（丸棒状工具）による懸垂文。内面、ナデ。D．石英、白色粒、黒色粒。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．2c 住覆土。

第３号住居跡（第 13・14 図、写真図版４・９）

調査区１区の南東部に位置し、第１号集石炉を切り、中央部を近現代の道路及び溝跡に削平されている。また、遺構の東側は調査区外である。規模は東西方向で最大 3.10m、南北方向で 5.20m を測り、深さは遺構確認面から最大で 34cm を測る。平面形は検出した範囲からやや歪な隅丸方形を呈するこ

とが推定される。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南に傾斜する。

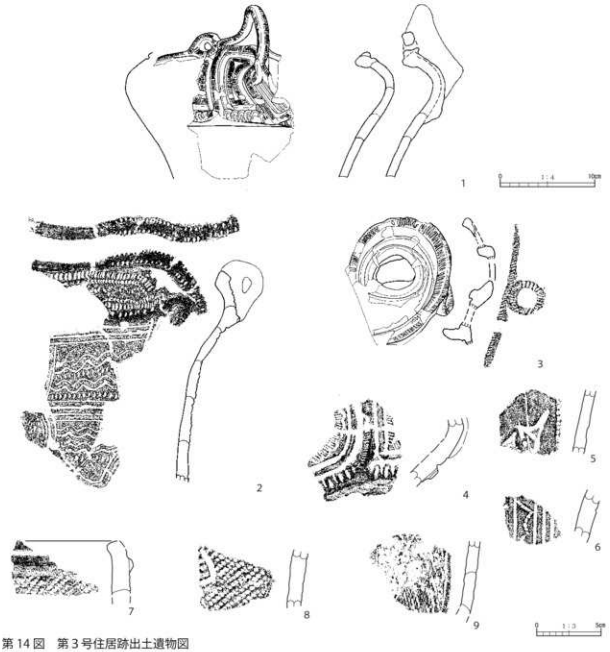
出土遺物は、縄文土器で、勝坂３式（井戸尻式期）、加曽利ＥⅡ～Ⅲ式が検出されている。本遺構の時期は、遺物の出土状況から縄文時代中期中葉から後葉と推定される。



第３号住居跡土層説明

第１層	黒褐色土	旧表土である黒色土の二次堆積土(古墳時代頃)。しまり・粘性ともに若干あり。
第２層	茶褐色土	ローム粒を多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。縄文時代中期頃の堆積層。
第３層	茶褐色土	ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。縄文時代中期頃の堆積層。
第４層	暗褐色土	ローム微粒子を若干含む。しまり・粘性ともにあり。
第５層	暗褐色土	ロームブロックを若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第６層	暗褐色土	ローム微粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第７層	暗褐色土	ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに強い
第８層	暗黄褐色土	上面は床面状を呈す。ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに強い。
第９層	明灰色砂質土	川砂利層(1～10mm)。しまり・粘性なし。
第10層	茶褐色土	ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに強い。
第11層	明褐色土	上面は床面状を呈す。白色パミス(YP)を若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第12層	明茶褐色土	ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに強い。
第13層	明黄色土	ロームの二次堆積層。しまり・粘性ともに強い。

第 13 図　第３号住居跡平面・断面図



第 14 図　第 3 号住居跡出土遺物図

第 6 表　第 3 号住居跡　出土遺物観察表

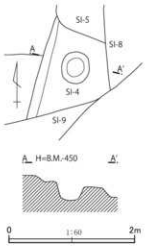
1	縄文土器 深鉢	A．復元口径（31.2）。残存高 18.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、半縁口縁。口唇部に横位隆帯・環状・山形状突起を貼付け。口縁部隆帯に頸部の横位隆帯を接続する。隆帯脇に半載竹管状工具による平行沈線を沿わせる。同工具によるキザミを充填。内側に三叉文を陰刻。隆帯上面に同工具によるキザミ。頸部隆帯の上面に蓮華文を施文。胴部ナデ。内面、ナデ。D．石英、雲母、赤色粒。E．内面 - 赤褐。　外面 - にぶい赤褐。F．口縁部～胴上部 1/4。H．3 住。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 17.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に環状把手を貼付け。口縁部下位の横位隆帯を把手下に接続する。把手・隆帯上面に半載竹管状工具によるキザミを施文。胴部は同工具を用いた平行沈線による横位・縦位区画、区画内に波状沈線とキザミを交互に横位施文。内面、ナデ。D．石英、黒色粒。E．内面 - にぶい赤褐。外面 - 赤褐。F．胴部破片。H．3 住。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 10.0。C．外面、環状突起。内側に半載竹管状工具による平行沈線を施文。脇に円環状突起を貼付け。周縁・突起上面に篦状工具による連続爪形文を施文。D．石英、黒色粒、雲母。E．内外面 - 赤褐。F．突起のみ。H．3 住。

4	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯による区画。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。隆帯脇に平行沈線（半截竹管状工具）を施文。区画内に爪形文（同工具先端）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、石英、角閃石、雲母。E．内面 - にぶい赤褐色、外面 - 明赤褐色。F．口縁部破片。H．Ⅰ区３住。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に玉抱き三叉文（丸棒状工具）と角押文（同工具）を施文。内面、ナデ。D．雲母、黒色粒。E．内外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．Ⅰ区３住。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に並行沈線（丸棒状工具）による懸垂文を施文。文様間に三角押文（尖頭状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．Ⅰ区３住。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。口縁部に隆帯文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、雲母。E．内面 - 明赤褐色、外面 - 橙色。G．８と同一個体か。F．口縁部破片。H．Ⅰ区３住。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。胴部に単沈線（丸棒状工具）による懸垂文を施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、石英。E．内外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。G．７と同一個体か。H．Ⅰ区３住。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に撚糸文Ｒを縦位施文。胴部に懸垂文（半截竹管状工具）。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、石英。E．内面 - にぶい橙色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．Ⅰ区３住。

第４号住居跡（第 15 図、写真図版４）

調査区２区の中央部に位置し、大部分を第５号住居跡、第８号住居跡、第９号住居跡に切られ、また、南側を近現代の道路及び溝跡に削平されている。規模は東西方向で最大 1.20m、南北方向で最大 1.74m を測り、深さは遺構確認面から最大で 11cm を測る。平面形は不明であるが、検出された壁部分が直線状を呈することから、方形または長方形を呈すると推定される。住居の方位は北西壁を基準にしたとき、N － 15°－ E の方位をとる。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って僅かに南に傾斜する。

出土遺物がないため、本遺構の時期は不明瞭であるが、第５号住居跡、第８号住居跡との切り合い関係から弥生時代に推定される。

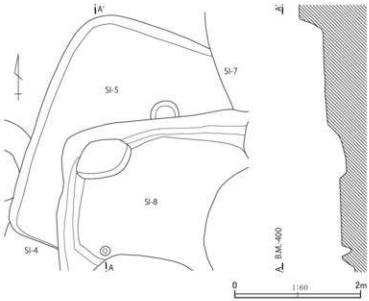


第 15 図　第４号住居跡平面・断面図

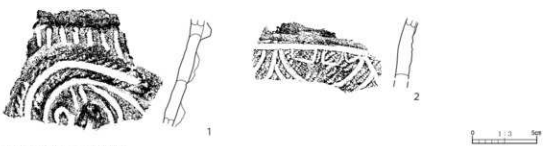
第５号住居跡（第 16・17 図、写真図版４・10）

調査区２区の中央部に位置し、第４号住居跡を切り、南側の大部分を第７号住居跡、第８号住居跡に切られる。規模は東西方向で最大 2.82m、南北方向で 3.82m を測り、深さは遺構確認面から最大で 40cm を測る。平面形は、残存する部分から方形または長方形を呈することが推定される。住居の方位は北西壁を基準にしたとき、N － 15°－ E の方位をとる。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って僅かに南に傾斜する。

本遺構の時期は、第７号住居跡との切り合い関係から弥生時代に推定される。



第 16 図　第５号住居跡平面・断面図



第 17 図　第５号住居跡出土遺物図

第７表　第５号住居跡　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 8.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯による渦巻文。隆帯上に単節ＬＲ縄文を横位施文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。文様間に縦位沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、チャート。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．２区５住。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。頸部に隆帯文。隆帯下に並行沈線（丸棒状工具）を施文。胴部に並行沈線（同工具）による懸垂文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．２区５住。

第６号住居跡（第 18 ～ 21 図、写真図版４・10）

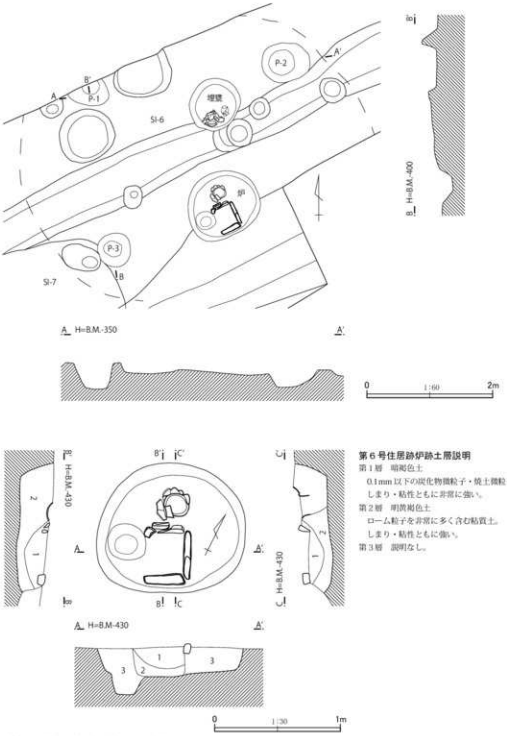
調査区２区の中央部やや東側に位置し、南西端を第７号住居跡に切られ、近現代の道路及び溝跡に中央部及び南側を削平されている。また、遺構の床面直上まで後世の削平を受けている。規模は東西方向で最大 5.32m を測る。平面形は、不明瞭であるが、やや歪な円形を呈していたと推測される。断面形は、削平により壁の立ち上がりを確認できず、床面のみの検出にとどまる。床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南に傾斜する。

柱穴はＰ－１～Ｐ－３の３か所で全てやや歪な円形を呈している。Ｐ－１は直径 62cm、床面からの深さ 31cm、Ｐ－２は直径 64 ～ 76cm、床面からの深さ 26cm、Ｐ－３は直径 50 ～ 54cm、床面からの深さ 20cm である。

本遺構に伴う炉は、石囲炉であり、遺構中央部やや南側に位置し、炉は後述の土器を含め、東西方向 122cm、南北方向 104cm、床面からの深さ 24cm の楕円形状を呈する土坑中に位置する。炉中央に土器の埋設はないが、方形の掘り込みをもち、掘り込み上端縁よりやや内側に長方形状の片岩を方

形に配置して構築されている。規模は、東西方向38cm、南北方向45cmを測り、長方形状を呈している。

また、住居跡中央部、炉の北側やや東寄りに隣接して、埋設された縄文土器（第20図4）が検出されている。この土器は断面C－C'より石囲炉の掘り込みに先んじて埋設されており、炉に先行する埋甕、または、炉に伴う遺構である可能性が考慮される。仮に後者であるならば、この土器に二次焼成痕が認められないことから、炉体としてではなく、煙の置場のような用途で使用されたものと推測される。なお、調査所見には、本炉が複式炉であった可能性も記されていたことを参考に記しておきたい。

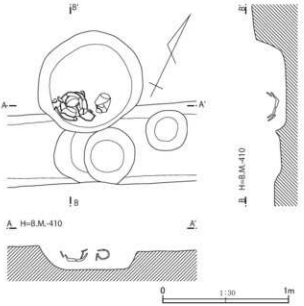


第18図　第６号住居跡・炉跡平面・断面図

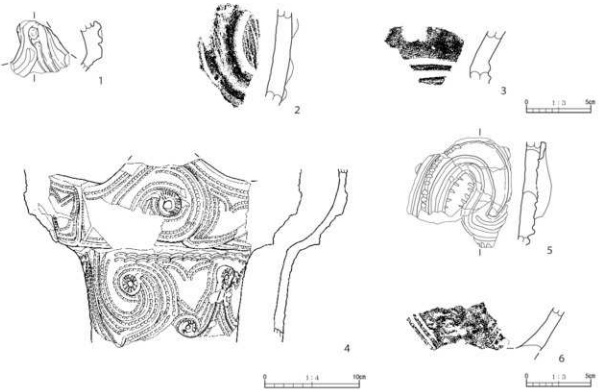
さらに、本住居跡内からは、埋甕（第21図5・6）も検出されており、東西方向94cm、南北方向80cm、床面からの深さ24cmの楕円形状を呈する土坑の南西部に、正位1基、逆斜位1基の深鉢が検出されている。深鉢はともに胴部中位から底部の検出である。ただし、埋甕と住居跡の先後関係は後世の削平の影響により確認することができなかった。

出土遺物は、縄文土器で、住居覆土中から勝坂式、加曽利EⅡ・Ⅲ式が少量検出されている。また、炉に隣接して阿玉台Ⅱ式（新道式期併行）、埋甕土坑より勝坂3式（井戸尻式期と推定される）の深鉢がそれぞれ検出されており、埋甕土坑の覆土中から少量の阿玉台Ⅰb式も検出されている。

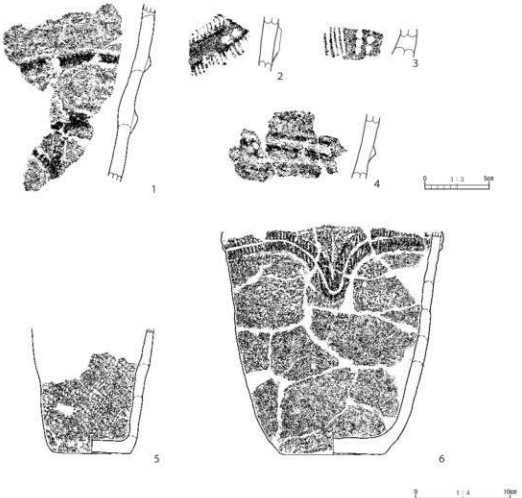
本遺構の時期は、複数時期の遺物が混在することから、時期に幅をもたせ縄文時代中期中葉から後葉を想定する。なお、炉に隣接して埋設された土器について、石囲炉に付随する場合、他の検出された土器と時期差があるため、住居の時期以前に廃棄された土器を再利用したものと考えられる。また、付随しない別の遺構とみなす場合、石囲炉をもつ住居に先行する時期の埋甕である可能性も想定される。



第19図　第6号住居跡埋甕平面・断面図



第20図　第6号住居跡・炉跡出土遺物図



第 21 図　第６号住居跡埋甕出土遺物図

第８表　第６号住居跡　出土遺物観察表

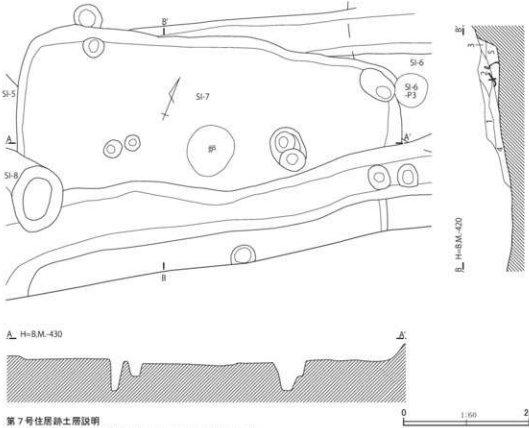
1	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆曲線文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内外面 - 灰褐色。F．口縁部破片。H．２区６住。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 7.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面､地文に撚糸文Ｒを縦位施文。胴部に隆帯による渦巻文。内面、ナデ。D．白色粒､片岩､チャート､角閃石。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．２区６住。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面、頸部に並行沈線（丸棒状工具）による区画。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、黒色粒。E．内外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．２区６住。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高 19.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面､波状口縁 (推定 4 単位)。頸部に断面三角形の隆帯を貼付け。口縁部は円環状突起を有する弧状の隆帯と斜位隆帯による区画。隆帯脇に半截竹管状工具による複列の押引文を施文。同様の手法で区画内に波状文を施文。頸部には同工具による複列沈線を波状に施文。胴部には円環状突起を有する弧状の隆帯と垂下隆帯を貼付け。隆帯脇に口縁部と同様の手法による複列の押引文を施文。隆帯間に押引による波状文を施文。内面、ナデ。D．雲母、石英、黒色粒、白色粒。E．内外面 - にぶい褐。F．口縁部～胴中部。H．炉№ 6。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 8.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯による渦巻文。隆帯脇に平行沈線（半截竹管状工具）と刻み（ヘラ状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．２区６住炉。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に平行沈線（半截竹管状工具）による懸垂文を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - 灰黄褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．２区６住炉。

第９表　第６号住居跡埋甕　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 14.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、断面三角形の隆帯による２段の楕円形区画。隆帯上面・脇をナデ。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫。E．内外面 - にぶい赤褐。F．胴部破片。H．ウメガメ一括。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に幅広の隆帯文。隆帯脇に角押文。内面、ナデ。D．白色粒、石英、角閃石。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．２区６住埋甕№ 1。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 2.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に並行沈線（丸棒状工具）による懸垂文を施文。文様間に角押文を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．埋甕一括。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線文。内面、ナデ。D．白色粒、石英、角閃石。E．内外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．２区６住埋甕一括。
5	縄文土器 深鉢	A．復元底部径（8.2）。残存高 13.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、単節Ｒ Ｌ縄文を横位施文。内面、ナデ。D．白色粒、褐色粒、黒色粒。E．内外面 - にぶい褐。F．胴部中位～底部 3/4。H．ウメガメ№ 1・2。
6	縄文土器 深鉢	A．底部径 11.0。残存高 23.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、平縁口縁か。口縁部は横位隆帯と２単位のＶ字状隆帯を貼付け。隆帯脇に丸棒状工具による沈線を沿わせる。隆帯上面から隆帯下位にかけて、箆状工具によるキザミ。胴部はナデ。内面、横位・斜位ナデ。D．石英、片岩、黒色粒。E．内面 - にぶい橙。外面 - 橙。F．底部～胴部ほぼ完形。H．６住、ウメガメ№ 1、ウメガメ一括。

第７号住居跡（第 22・23 図、写真図版４・11）

調査区２区の中央部に位置し、第４号住居跡、第５号住居跡、第６号住居跡を切り、南西部を第８号住居跡に切られ、中央部を近現代の道路跡及び溝跡に削平される。また遺構の南側は調査区外であ



第７号住居跡土層説明

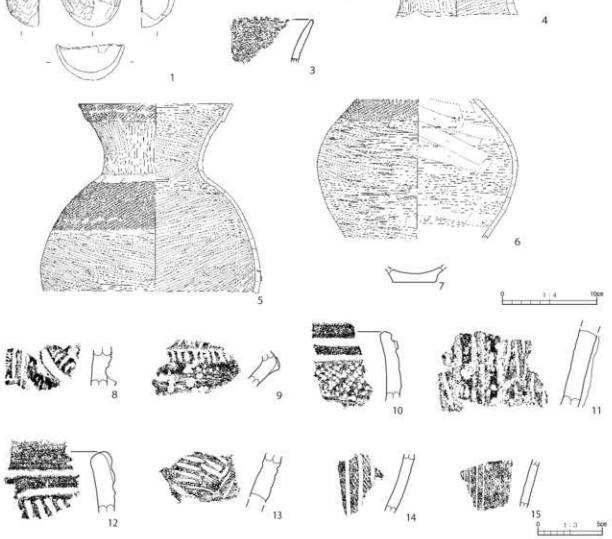
第１層　黒褐色土　ローム微粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第２層　暗褐色土　焼土微粒子（～1mm 以下）・黄色～白色微粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第３層　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに強い。
第４層　茶褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒を多く含む。しまり・粘性ともに強い。
第５層　茶褐色土　炭化物粒子・ローム粒を多く含む。しまり・粘性ともに強い。

第 22 図　第７号住居跡平面・断面図

る。規模は東西方向で 6.18m、南北方向で最大 4.70m を測り、深さは遺構確認面から最大で 40cm を測る。平面形は残存する部分から方形または長方形を呈することが推定される。住居の方位は北壁を基準にしたとき、N－75°－E の方位をとる。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦である。

本遺構に伴う炉は遺構中央部やや北寄りに位置し、規模は 82cm 程度の歪な円形をしている。残存状況は悪く、熱により硬質化した面が円形に痕跡を留めるのみである。

出土遺物は、吉ヶ谷式土器を主体とし、樽式土器、縄文土器も含む。主体となる土器は弥生時代から古墳時代への過渡期のもので、弥生時代の意匠を留めている。本遺構の時期は、覆土の状況と出土遺物の様相から、弥生時代後期末葉から古墳時代前期と推定される。



第 23 図　第 7 号住居跡出土遺物図

第10表　第７号住居跡　出土遺物観察表

1	弥生土器 舟形土器	A．残存長 9.4、最大幅 7.2、器高 3.8。B．手捏ね。C．内外面、ケズリ状の強いヘラナデ後、雑なミガキ。D．赤色粒、白色粒。E．内面 - 暗茶褐色、外面 - 淡茶褐色。F．3/4。G．外面に黒斑あり。焼成良好。匙として柄が付いていた可能性がある。H．SI-7。
2	弥生土器 鉢	A．復元口径（18.0）。復元底部径（4.3）。残存高 18.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。D．白色粒・黒色粒・褐色粒・石英・角閃石。E．内外面 - にぶい橙色。F．1/4。H .SI-7。
3	弥生土器 甕	A．復元口径（17.0）。復元高（6.3）。B．粘土紐積み上げ。C．外面、波状文。内面、ナデ。D．白色粒・黒色粒・褐色粒。E．内外面 - にぶい橙色。F．口縁部破片。H .SI-7
4	弥生土器 壺	A．口縁部径 19.4、残存高 9.2。B．粘土紐積み上げ。C．口縁部、内外面ナデ後、外面に縄文施文。頸部、内外面にナデ後、丁寧なミガキ。D．赤色粒、白色粒。E．内外面 - 淡褐色。F．口縁部のみ。G．口縁部内外面に黒斑あり。頸部粘土積み上げ面で割れている。頸部内面に斑点状剥落顕著。焼成良好。H．SI-7。
5	弥生土器 壺	A．口縁部径 16.4、残存高 20.3。B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面、ナデ後、縄文施文。頸部外面、ミガキ。肩部上端、ヘラナデ。肩部、ナデ後、縄文施文。胴部外面、ナデ後、ミガキ。内面、ヘラナデ後、ミガキ。D．赤色粒、白色粒。E．内外面 - 淡褐色。F．口縁部から胴部上半。G．焼成良好。H．SI-7。
6	弥生土器 壺	A．残存高 14.9。B．粘土紐積み上げ。C．内面、ヘラナデ後、ミガキ、一部ケズリ。外面、小口状工具によるハケ後、ミガキ、肩部外面に縄文施文。D．片岩粒、黒色粒、白色粒。E．内面 - 淡褐色。外面 - 淡茶褐色。F．胴部 1/2 弱。G．胴部内面下半に斑点状の剥落顕著。焼成良好。H．SI-7。
7	弥生土器	A．底部径 4.6、残存高 1.6。B．粘土紐積み上げ。C．内外面、ナデ。D．赤色粒、白色粒、E．内面 - 暗茶褐色、外面 - 淡茶褐色、F．底部のみ。H．SI-7。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯区画。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。区画内パネル文を施文。内面、ナデ。D．黒色粒、白色粒、角閃石。E．内面 - 明赤褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．SI-7。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高 2.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、隆帯区画。隆帯上に刻み（ヘラ状工具）。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内面 - 灰黄褐色、外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．SI-7 覆土。
10	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。口縁部に隆帯文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、礫。E．内面 - 明赤褐色、外面 - にぶい褐色。F．口縁部破片。H．SI-7 覆土。
11	縄文土器 深鉢	A．残存高 6.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に条線文（丸棒状工具）を施文。胴部に懸垂隆帯。内面、ナデ。D．黒色粒、角閃石、雲母、白色粒。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．SI-7。
12	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。区画内短沈線（同工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、片岩。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．口縁部破片。H．SI-7 覆土。
13	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線文。隆線文間に短沈線（丸棒状工具）による綾杉文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、チャート。E．内面 - にぶい赤褐色、外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．SI-7 覆土。
14	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を縦位施文。並行沈線（丸棒状工具）による懸垂文を施文。文様内磨消。内面、ナデ。D．黒色粒、角閃石、白色粒。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．SI-7。
15	縄文土器 深鉢	A．残存高 3.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に懸垂文（４条以上の櫛歯状工具）を施文。内面、ナデ。D．角閃石、石英。E．内面 - 橙色、外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．SI-7 覆土。

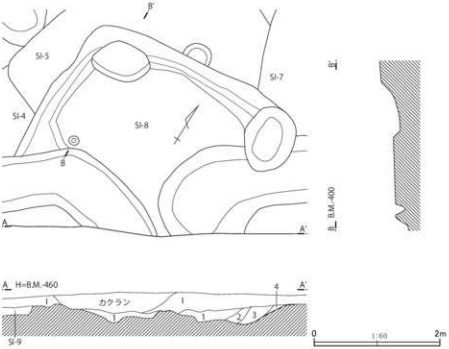
第８号住居跡（第 24 ～ 26 図、写真図版４・11）

調査区２区の中央部に位置し、第４号住居跡、第５号住居跡、第７号住居跡を切り、南部を近現代の道路跡及び溝跡に切られる。遺構の南半部は調査区外である。規模は東西方向で 3.70m、南北方向で最大 2.80 m を測り、深さは遺構確認面から最大で 20cm を測る。平面形は残存する部分から方形または長方形を呈すると推定される。住居の方位は北西壁を基準にしたとき、Ｎ－３°－Ｅの方位をとる。断面形は、壁がやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦である。残存する各壁下には壁溝が残存しており、幅 56cm、深さは床面から最大で 25cm を測る。

本遺構に伴うカマドは、近現代の道路及び溝跡に削平された調査区南壁の南東壁端で痕跡が検出されているが、残存状況が悪く、規模・形態は不明である。燃焼面は底面の一部が部分的に残存しており、

住居の床よりやや低く掘り下げられていたようである。

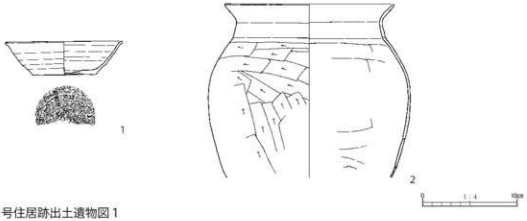
出土遺物は、土師器を主体とし、僅かに須恵器・縄文土器を含む。本遺構の時期は、住居の形態や出土遺物から平安時代の９世紀後半頃と推定される。



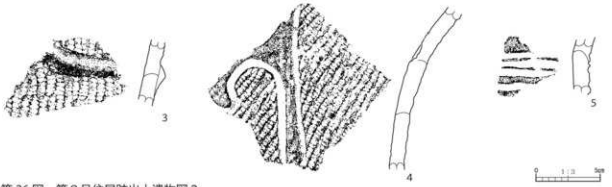
第８号住居跡土層説明

第１層　暗灰褐色土　As-A 軽石・ローム粒・ロームブロックを非常に多く含む。しまり・粘性ともになし。近現代の溝跡覆土。
第２層　明赤灰色土　焼土ブロックを多く含む。しまり・粘性ともに強い。カマドの痕跡あり。
第３層　灰褐色土　炭化物を若干含む。しまり・粘性ともに強い。カマドの痕跡あり。
第４層　暗灰褐色土　炭化物・焼土粒・ローム粒を含む。しまり・粘性ともに強い。

第 24 図　第８号住居跡平面・断面図



第 25 図　第８号住居跡出土遺物図１



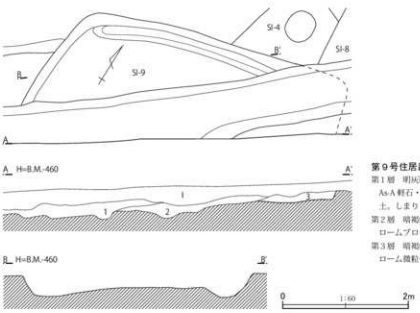
第 26 図　第８号住居跡出土遺物図２

第 11 表　第８号住居跡　出土遺物観察表

1	須恵器 坏	A．口径 12.4。底径 6.4。器高 3.5。B．ロクロ成形。C．外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D．白色粒・黒色粒・礫。E．内外面 - 灰色。F．1/2。G．還元焔焼成。H．フク土。
2	土師器 甕	A．復元口径（18.0）。残存高 18.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D．白色粒、黒色粒、石英。E．内外面 - 橙色。F．口縁部～胴部下位 1/5。H．フク土。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 5.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯文。隆帯貼付後、単節ＬＲ縄文を斜位施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、礫。E．内面 - にぶい橙色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．８住覆土。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高 12.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文。胴部に単沈線（丸棒状工具）による懸垂文を施文。文様内磨消。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、礫。E．内面 - 橙色、外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．８住覆土。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高 4.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、頸部に４条の横位並行沈線（丸棒状工具）。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．胴部破片。H．８住覆土。

第９号住居跡（第 27 図、写真図版４・５）

調査区２区の中央部に位置し、第４号住居跡を切り、近現代の道路及び溝跡に削平される。遺構の南半部は調査区外である。規模は東西方向で 3.00m、南北方向で最大 1.36m を測り、深さは遺構確認面から最大で 25cm を測る。平面形は残存する部分から方形または長方形を呈すると推定される。



第９号住居跡土層説明

第１層　明灰褐色土
As-A 軽石・ローム粒・ロームブロックを多く含む。近現代耕作土。しまり・粘性ともになし。

第２層　暗褐色土
ロームブロックを多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。

第３層　暗褐色土
ローム微粒子を多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。

第 27 図　第９号住居跡平面・断面図

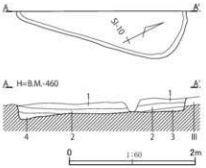
住居の方位は西壁を基準にしたとき、N－13°－Eの方位をとる。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。

出土遺物は本遺構に伴うものはないが、周辺の調査成果より得られた土質に関する所見から、覆土の様相が古墳時代の住居跡に伴うものであると推定されるため、本遺構の時期は古墳時代の可能性が高いと考えられる。

第 10 号住居跡（第 28 図、写真図版 5）

調査区２区の南西部、調査区北壁沿いに位置する。遺構の北側大部分は調査区外である。北東から南西方向で 2.60m、北西から南東方向で最大 0.84m を測り、深さは遺構確認面から最大で 22cm を測る。平面形は残存する部分から方形または長方形を呈すると推定される。住居の方位は北東壁を基準にしたとき、N－50°－Eの方位をとる。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。

出土遺物は本遺構に伴うものがなく、本遺構の時期は不明である。



第 10 号住居跡土層説明

第１層　暗褐色土
　炭化物微粒子を多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。
第２層　暗褐色土
　炭化物・ローム微粒子を含む。しまり・粘性ともに若干あり。
第３層　暗褐色土
　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。
　下層に床面である硬化面が認められる。
第４層　暗褐色土
　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性ともに若干あり。第３層と同類層。

第 28 図　第 10 号住居跡平面・断面図

第 11a 号住居跡（第 29・30 図、写真図版 5・12）

調査区２区の南西端に位置し、大部分を第 11b 号住居跡に切られる。また、後世の削平により遺構の床面直上まで失っており、壁の立ち上がりは不明である。規模は南北方向で最大 2.40m を測り、平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈するものと推定される。大部分が重複する第 11b 号住居跡により深く掘り下げられているため、床面の深さは不明である。検出された部分は住居北西部の壁溝のみで、幅 30cm、深さは遺構確認面から 30cm を測る。

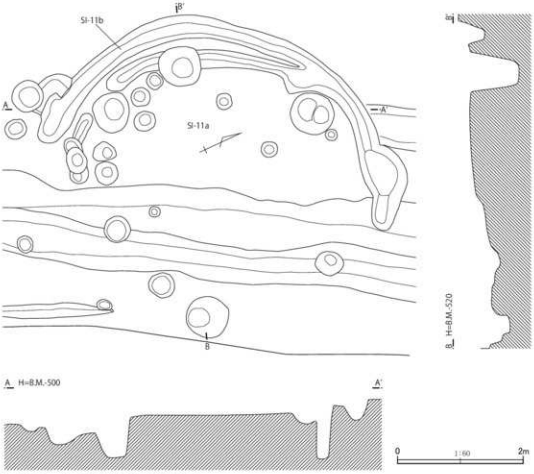
出土遺物は本遺構の大部分が第 11b 号住居跡と切り合うことから、同住居の遺物と峻別することはできない。本遺構の時期は、第 11b 号住居跡との重複関係から縄文時代中期頃と推定される。

第 11b 号住居跡（第 29・30 図、写真図版 5・12）

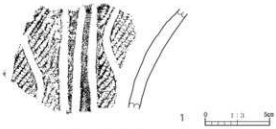
調査区２区の南西端に位置し、第 11a 号住居跡を切り、南半部を近現代の道路及び溝跡に削平されている。また、後世の削平により、壁の立ち上がりは不明瞭である。壁溝の重複関係から、第 11a 号住居跡との関係は建替によるものの可能性が高い。

規模は東西方向で 4.20m、南北方向で最大 3.00m を測り、深さは遺構確認面から最大で 21cm を測る。平面形は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推定される。削平により壁の立ち上がりは不明瞭であるが、壁溝の一部は残存しており、幅 40cm、深さは床面から最大で 29cm を測る。

出土遺物は、縄文土器で、第 11a 号住居跡の遺物と峻別することはできないが、加曾利ＥⅢ式を主体とする。本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉と推定される。



第 29 図　第 11a・b 号住居跡平面・断面図



第 30 図　第 11a・b 号住居跡出土遺物図

第 12 表　第 11a・b 号住居跡　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 7.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を縦位施文。胴部に３条一組の並行沈線（丸棒状工具）による懸垂文区画。懸垂文内磨消。区画内に単沈線（同工具）による懸垂文を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内面 - にぶい黄橙色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．２区 11a・b 住。

2．掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第31・32図、写真図版５・12）

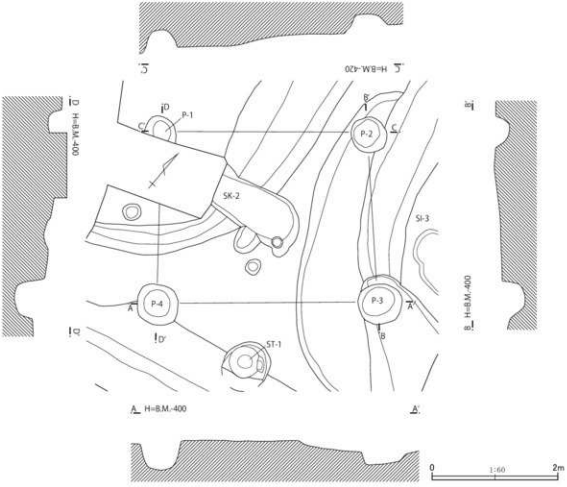
調査区の１区南西部に位置し、第３号住居跡と重複関係をもち、４柱の範囲内に第２号土坑が所在する。それぞれの新旧関係は不明で、Ｐ－１を除く３柱は近現代の溝跡に上層部を削平されている。

規模は東西方向3.40m、南北方向2.70mを測り、東西方向にやや長い１間１間の長方形をしている。建物の方位は、北東柱－南東柱を結ぶ線を基準にして、Ｎ－50°－Ｅに向いている。

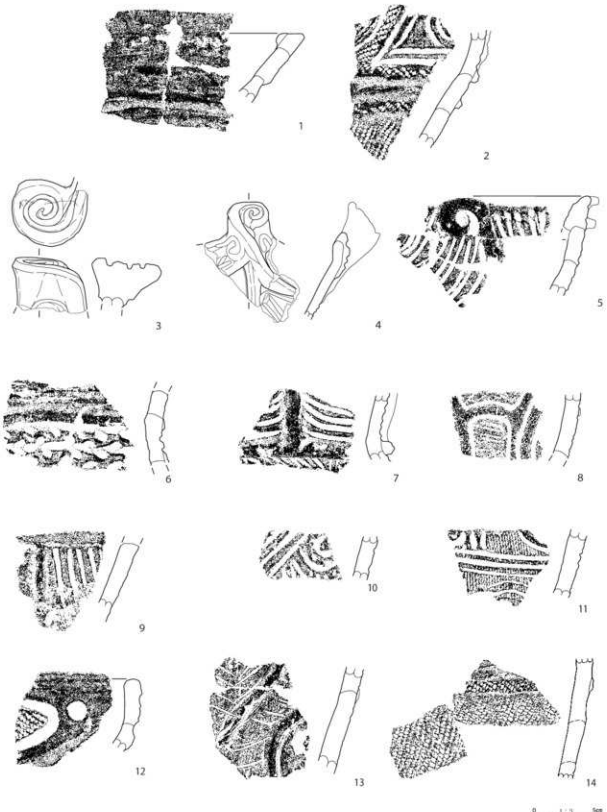
柱穴の規模・深さは、それぞれＰ－１が直径62cm、深さ20cm、Ｐ－２が直径58cm、深さ32cm、Ｐ－３が直径70cm、深さ29cm、Ｐ－４が直径64cm、深さ45cmを測り、円形を呈している。出土遺物は、Ｐ－１から検出された縄文土器であり、勝坂式終末期、加曽利ＥⅡ式新段階、曽利Ⅱ式、加曽利ＥⅢ式を含む。

本遺構の時期について、発掘調査当時には、検出された縄文土器を基準に縄文時代中期に遡る掘立柱建物跡と推定されたものである。しかし、本遺跡では、縄文時代以降の遺構であっても多くの縄文土器の混入が認められることから、これらの遺物をもって、本遺構を積極的に縄文時代と断定することは些か早計の感を否めない。むしろ、隣接する第１号土器棺墓と本遺構の位置関係に注目しておきたい。

そのため、これまでの見解については解釈の１つとするに留め、本遺構に関する解釈は、今後の周辺地域での掘立柱建物の検出による類例の増加を待って改めて検討したい。



第31図　第１号掘立柱建物跡平面・断面図



第 32 図　第 1 号掘立柱建物跡出土遺物図

第13表　第１号掘立柱建物跡　出土遺物観察表

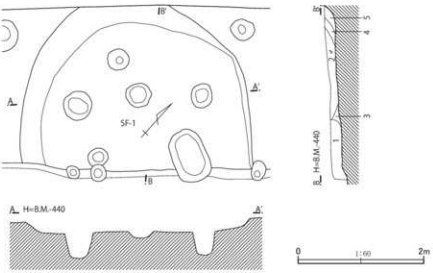
1	縄文土器 深鉢	A．残存高5.5。B．粘土紐積み上げ。C．肥厚口縁。外面、肥厚部下に凹線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母。E．内面 - 橙色、外面 - 赤褐色。F．口縁部破片。H．I 区 SK-10。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高9.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を縦位施文。胴部に隆帯による区画。隆帯上に単節ＲＬ縄文を横位施文。隆帯脇に並行沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内面 - 橙色、外面 - 赤褐色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高4.0。B．粘土紐積み上げ。C．突起部。外面、渦巻状突起を貼付。突起下に沈線文（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母、角閃石。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．口縁部突起破片。H．I 区 SK-10。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高9.3。B．粘土紐積み上げ。C．波状口縁。外面、波頂部に渦巻状突起。渦巻状突起下から延びる隆線文。隆線区画内に単沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、片岩。E．内面 - 橙色、外面 - 明赤褐色。F．口縁部把手破片。H．I 区 SK-10。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高7.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に重弧文（丸棒状工具）を施文。口縁部に隆帯による渦巻文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 明赤褐色。F．口縁部破片。H．I 区 SK-10。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高6.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、頸部に隆帯区画。区画内に並行沈線（丸棒状工具）と交互刺突（同工具先端）を施文。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、片岩、角閃石。E．内面 - 橙色、外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高5.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆帯による区画。区画内に重弧文（丸棒状工具）と斜行文（同工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、片岩。E．内面 - にぶい褐色、外面 - 明赤褐色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高5.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に懸垂隆帯。区画内に沈線（半截竹管状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、角閃石。E．内外面 - 橙色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
9	縄文土器 深鉢	A．残存高6.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に懸垂隆線と多条沈線文（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母、角閃石。E．内面 - にぶい橙色、外面 - にぶい褐色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
10	縄文土器 深鉢	A．残存高3.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。胴部に並行沈線（丸棒状工具）による渦巻文及び斜行文を施文。内面、ナデ。D．白色粒、チャート、礫。E．内外面 - 橙色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
11	縄文土器 深鉢	A．残存高5.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に撚糸文Ｒを縦位施文。胴部に平行沈線（半截竹管状工具）による弧線文を施文。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、石英。E．内外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．I 区第１トレンチ。
12	縄文土器 深鉢	A．残存高5.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文。口縁部に隆帯文。隆帯上に円形刺突（丸棒状工具先端）。隆帯脇に沈線（同工具）を施文。内面、ナデ。D．雲母、片岩、角閃石、白色粒。E．内外面 - にぶい赤褐色。F．口縁部破片。H．I 区 SK-10。
13	縄文土器 深鉢	A．残存高8.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線文。隆線文間に沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩。E．内面 - にぶい褐色、外面 - にぶい橙色。F．胴部破片。H．I 区 SK-10。
14	縄文土器 深鉢	A．残存高9.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、横位隆帯を貼付け。隆帯上面に単節ＲＬ縄文を横位施文。隆帯下位に単節ＲＬ縄文を縦位施文。内面、横位・縦位ナデ。D．白色粒、雲母、片岩、礫。E．内面 - にぶい褐。外面 - 赤褐。F．胴部破片。H．SK-10。

３．竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第33・34図、写真図版５・12）

調査区２区の中央部やや西側に位置する。遺構の上層部及び南半部は近現代の道路及び溝跡に削平されている。規模は北東から南西方向で3.66m、北西から南東方向で最大2.70mを測り、深さは遺構確認面から最大で16cmを測る。平面形状は検出した範囲から円形または楕円形を呈することが推定される。壁はやや傾斜して立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南にやや傾斜する。

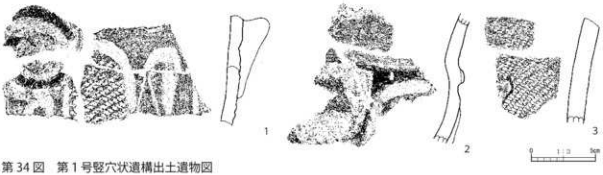
出土遺物は、加曽利ＥⅢ式等の縄文土器を主体とし、わずかに土師器を含む。本遺構の時期は、断面図から第１層のような後世の削平を受けていることが認められ、第２層についても後世の掘削ではないと判断する要素がない。また、検出された土器は全て覆土中からの一括資料であり、基本層の様相も踏まえるならば、検出した土器が本遺構に伴うものと考えることは難しい。そのため、本遺構の時期は不明とするのが適当であろう。



第１号竪穴状遺構土層説明

第１層　暗褐色土　As-A 軽石を多量に含み、茶褐色土を斑点状に含む。しまり弱く、粘性なし。
第２層　暗褐色土　白色粒子・ローム微粒子を均質に少量含み、炭化物粒を微量に含む。しまりあり・粘性弱い。
第３層　明褐色土　黄褐色ロームを多量に含み、炭化物粒を微量に含む。しまりあり・粘性弱い。
第４層　暗茶褐色土　炭化物粒・ローム粒を均質に含む。しまりあり・粘性弱い。
第５層　茶褐色土　ローム粒を少量含み、炭化物粒を斑点状に含む。しまり・粘性ともにあり。

第 33 図　第１号竪穴状遺構平面・断面図



第 34 図　第１号竪穴状遺構出土遺物図

第 14 表　第１号竪穴状遺構　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高 8.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、渦巻状突起を貼付け。単節ＬＲ縄文を横位施文。丸棒状工具を用いた沈線で懸垂文を施文。文様間を磨り消し。内面、ナデ。D．石英、片岩、黒色粒。E．内面 - 褐灰。外面 - にぶい黄橙。F．胴上部破片。H．竪穴状遺構。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高 10.15。B．粘土紐積み上げ。C．外面、横位・縦位隆帯による楕円形区画。隆帯脇に丸棒状工具による沈線を沿わせる。ナデ。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、褐色粒、角閃石、チャート、礫。E．内外面 - にぶい黄橙。F．胴上部破片。H．竪穴状遺構。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高 8.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、単節ＬＲ縄文を横位施文。丸棒状工具による渦巻文か。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石。E．内外面 - にぶい黄橙色。F．胴部破片。H．竪穴状遺構。

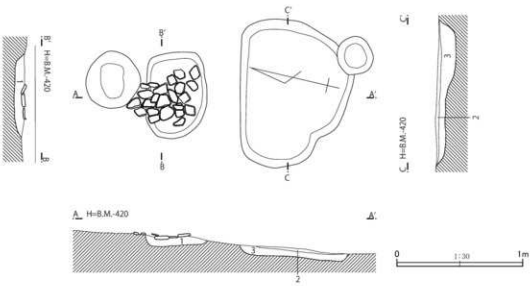
４．集石炉

第１号集石炉（第 35 図、写真図版６）

調査区１区の南東部に位置し、被熱した石が集められた土坑と砂利が敷き詰められた土坑で構成される。集石炉部分は長軸 1.36m、短軸 0.96m、付随する土坑は長軸 2.28m、短軸 1.80m であり、深さは遺構確認面から 14cm である。

本遺構は住居跡に含めていないが、土層の堆積状況や周辺の床面の状態から縄文時代の竪穴住居に付随する炉跡の可能性があり、この場合、覆土の状況から第３号住居跡に先行する住居に伴う炉跡の可能性が高い。

出土遺物は、第３号住居跡との峻別が困難であるため、遺構に伴うと断定できるものはない。本遺構の時期は、第３号住居跡との重複関係から縄文時代の第３号住居跡に先行する時期と推定される。



第１号集石炉土層説明

第１層　暗褐色土　　１～2mm程度の炭化物・ローム粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。
第２層　暗褐色砂質土　川砂主体の層。１～10mm程度の小石を多く含み、泥の混入は見られない。しまり・粘性ともにない。
第３層　暗褐色土　　１～3cmのロームブロックを若干含む。しまり・粘性ともに強い。

第 35 図　第１号集石炉平面・断面図

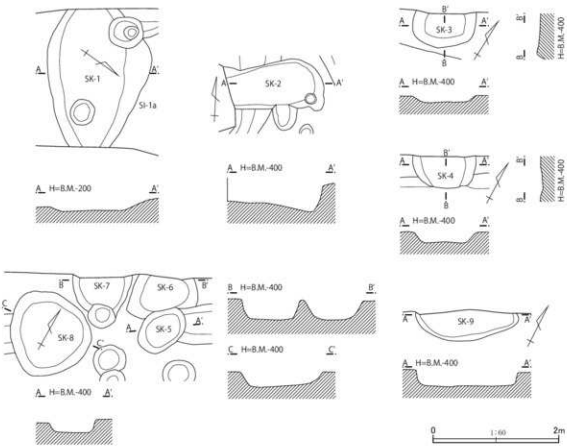
５．土坑

土坑は、第１～９号土坑まで９基を検出した（第 36 ～ 39 図、写真図版５・６・13）。

検出された土坑９基は、第１～３号土坑が単独で点在し、第４～９号土坑が２区東側に密集して分布する。遺物は、主に勝坂式から加曽利ＥⅢ式までの時期の縄文土器である。

第１号土坑は、縄文時代の住居跡である第１ａ号住居跡を切り、出土遺物は、主に縄文土器で、加曽利ＥⅢ式をやや多く含み、他に勝坂式、連弧文土器を少量含む。また、弥生土器片もわずかに含む。第２号土坑は第１号掘立柱建物跡内に位置する。第３号土坑は他の２区の土坑からやや離れた地点に所在し、出土遺物は加曽利ＥⅡ・Ⅲ式、連弧文土器、曽利Ⅲ式等の縄文土器である。第４～９号土坑は、調査区を横断する近現代の溝跡に上層部を削平されており、残存状況は芳しくない。出土遺物は少ないが、第７号土坑で勝坂式土器等が検出されている。

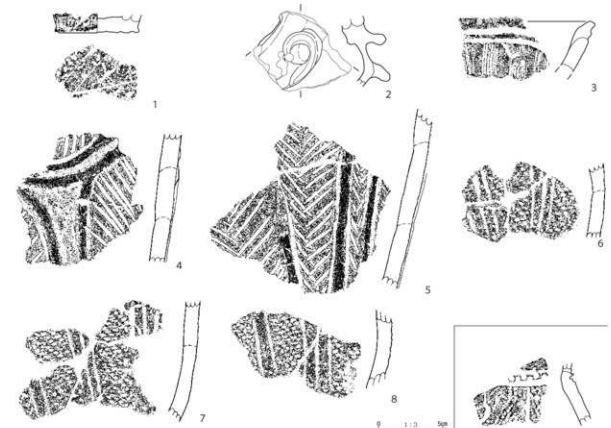
総じて縄文土器を含む土坑が多いものの、明確な遺構との共伴関係を示す遺物は検出されておらず、時期の決定については慎重にならざるを得ない。なお、それぞれの遺構の規模、深さについては第 15 表のとおりである。



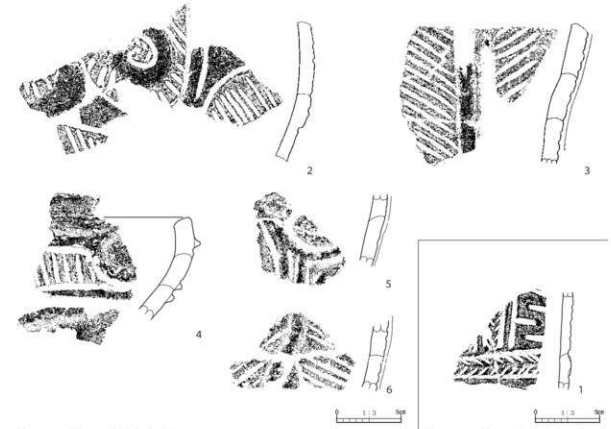
第 36 図　第 1 ～ 9 号土坑平面・断面図

第 15 表　第 1 ～ 9 号土坑観察表

遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形状	検出遺物
第 1 号土坑	2.20m	1.64m	16cm	楕円形	縄文土器、弥生土器
第 2 号土坑	1.50m	0.80m	38cm	楕円形	未検出
第 3 号土坑	1.00m	0.52m	13cm	楕円形	縄文土器
第 4 号土坑	1.02m	0.50m	17cm	楕円形	未検出
第 5 号土坑	0.85m	0.60m	28cm	楕円形	未検出
第 6 号土坑	1.15m	0.70m	42cm	楕円形	縄文土器
第 7 号土坑	1.04m	0.60m	31cm	楕円形	縄文土器
第 8 号土坑	1.38m	1.26m	36cm	歪な円形	縄文土器
第 9 号土坑	1.63m	0.50m	25cm	楕円形	未検出



第 37 図　第 1 号土坑出土遺物図



第 38 図　第 3 号土坑出土遺物図

第 39 図　第 7 号土坑出土遺物図

第16表　第1号土坑　出土遺物観察表

1	弥生土器	A．底部径6.8,残存高1.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面,底面に木葉痕。内面,ナデ。D．白色粒,角閃石,黒色粒。E．内面 - 橙色、外面 - にぶい黄橙色。F．底部破片。H．SK-1 覆土。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高5.6。B．粘土紐積み上げ。C．波状口縁。外面、環状突起貼付。内面、ナデ、爆ぜ。D．白色粒、角閃石、黒色粒。E．内面 - 明褐色、外面 - 赤褐色。F．口縁部把手破片。H．SK-1 覆土。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高4.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に条線文（10条の櫛歯状工具）を施文。口縁部に2条の並行沈線（丸棒状工具）を施文。内面、ナデ。D．白色粒、石英、黒色粒。E．内外面 - 橙色。F．口縁部破片。H．SK-1 覆土。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高10.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、隆帯による楕円または渦巻文を貼付け。隆帯脇に半截竹管状工具による沈線を沿わせる。隆帯間に同工具による斜位沈線を充填。一部無文または磨り消し。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、角閃石。E．内面 - にぶい赤褐。外面 - 明赤褐。F．胴部破片。H．フク土。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高14.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、3条の垂下隆帯を貼付け。隆帯脇に半截竹管状工具による沈線を沿わせる。隆帯間に同工具による矢羽状の沈線を充填。内面、ナデ。D．石英、白色粒、黒色粒、角閃石、チャート。E．内面 - 明赤褐。外面 - にぶい橙。F．胴部破片。H．フク土。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高9.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面、単節R L縄文を横位施文。半截竹管状工具による3条1単位の沈線を縦位施文。沈線間を磨り消し。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、チャート、礫。E．内面 - 黒褐。外面 - にぶい黄橙。F．胴部破片。G．7・8と同一個体か。H．フク土。
7	縄文土器 深鉢	A．残存高6.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面、単節R L縄文を横位施文。半截竹管状工具による3条1単位の沈線を縦位施文。沈線間を磨り消し。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、チャート、礫。E．内面 - にぶい黄橙。外面 - 橙。F．胴部破片。G．6・8と同一個体か。H．フク土。
8	縄文土器 深鉢	A．残存高5.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、単節R L縄文を横位施文。半截竹管状工具による3条1単位の沈線を縦位施文。沈線間を磨り消し。内面、ナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、チャート、礫。E．内面 - 橙。外面 - 黒褐。F．胴部破片。G．6・7と同一個体か。H．フク土。

第17表　第3号土坑　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高4.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に無節L縄文を横位施文。頸部に平行沈線（半截竹管状工具）を施文後、交互刺突（丸棒状工具先端）。胴部に単沈線（丸棒状工具）による懸垂文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、雲母、角閃石。E．内面 - にぶい赤褐色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．SK-3 覆土。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高11.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、幅広の隆帯による渦巻状または楕円形区画か。隆帯脇に半截竹管状工具による沈線を沿わせる。隆帯脇に弧状の沈線を施文。区画内に同工具による斜位沈線を充填。内面、ナデ。D．石英、白色粒、黒色粒、角閃石、チャート。E．内外面 - にぶい褐。F．胴部破片。H．フク土。
3	縄文土器 深鉢	A．残存高11.05。B．粘土紐積み上げ。C．外面、2条1単位の垂下隆帯を貼付け。半截竹管状工具による矢羽状の斜位沈線を充填。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、礫。E．内外面 - 橙。F．胴部破片。H．フク土。
4	縄文土器 深鉢	A．残存高8.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面、口縁部に隆帯文。隆帯脇に沈線（丸棒状工具）を施文。区画内に単沈線（同工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、石英、片岩。E．内面 - 橙色、外面 - 明赤褐色。F．口縁部破片。H．SK-3 覆土。
5	縄文土器 深鉢	A．残存高5.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、地文に単節L R縄文を横位施文。胴部に懸垂隆帯。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、石英。E．内面 - にぶい橙色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．SK-3 覆土。
6	縄文土器 深鉢	A．残存高5.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に隆線。隆線間に沈線（丸棒状工具）を充填施文。内面、ナデ。D．白色粒、片岩、礫。E．内外面 - 明赤褐色。F．胴部破片。H．SK-3 覆土。

第18表　第7号土坑　出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	A．残存高7.7。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部に平行沈線（半截竹管状工具）による区画。平行沈線内に刻み（ヘラ状工具）。区画内にパネル文を施文。内面、ナデ。D．黒色粒、白色粒、雲母、角閃石。E．内面 - にぶい橙色、外面 - 橙色。F．胴部破片。H．SK-7。

6．土器棺墓

第1号土器棺墓（第40・41図、写真図版6・14）

調査区1区の南部、第1号掘立柱建物跡南側に隣接し、遺構の南側一部を近現代の溝跡に削平されている。

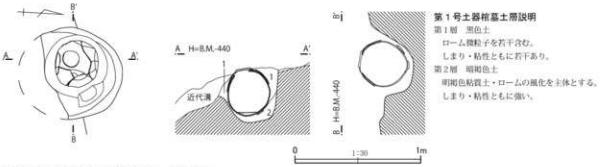
また、土器棺を埋設するための墓壙の規模は、直径70cmを測り、深さは上層を削平されているも

のの、遺構確認面から最大で、40cm を測る。平面形状は円形状を呈しており、断面形状は底面が隅丸となる台形状を呈している。

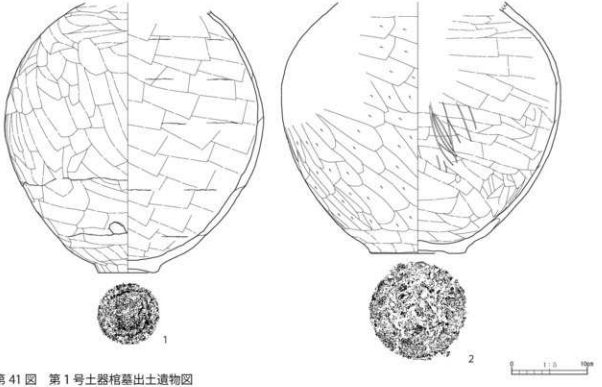
土器棺は、身部と蓋部の２基の大型壺で構成されている。身部の土器（第 41 図１）は、頸部より上位が焼成後に打ち欠かれており、胴部下位に焼成後の穿孔が見られる。また、蓋部の土器（第 41 図２）は、胴部中位から底部が土器棺の蓋として用いられており、検出時は、胴部中位以下を逆位にし、棺蓋として身部の土器に被せられていた。なお、蓋部の土器は、蓋として用いるにあたり、胴部中位から上位が打ち欠かれているが、その破片も検出されており、検出時には身部の底面に敷かれていたようである（第 40 図）。断面図と写真記録から、おそらく穿孔部の周辺に敷かれていたものと考えられるが、穿孔部を覆っていたかは不詳である。また、蓋部の土器も身部同様に頸部より上位が検出されていない。

本遺構の時期は、使用されている土器の形態から古墳時代中期頃の可能性が高いと考えられる。

なお、隣接する前組羽根倉遺跡では弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての墓域が検出されており（前組遺跡発掘調査団 1986）、周辺の土地利用を考える上で、本遺構との関係性が注目される。



第 40 図　第１号土器棺墓平面・断面図



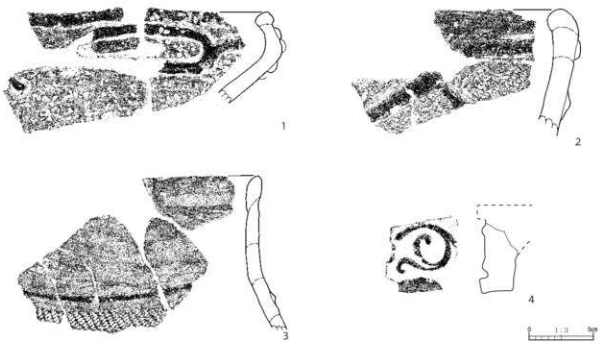
第 41 図　第１号土器棺墓出土遺物図

第19表　第１号土器棺墓　出土遺物観察表

1	土師器 壺	A．底部径8.0。残存高35.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面、胴部ヘラナデ、底部ナデ。内面、胴部～底部ナデ。D．片岩、石英、黒色粒、白色粒、角閃石。E．内面 - にぶい赤褐色、外面 - 明赤褐色。F．胴部～底部ほぼ遺存。G．土器棺の身。胴部下位に焼成後の穿孔。H．土器棺墓最下部。
2	土師器 壺	A．底部径12.4。残存高33.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、頸部～胴部下位ヘラケズリ、胴部下位ヘラナデ、底部ナデ。内面、頸部～胴部上位ナデ、胴部中位～底部ヘラナデ。D．黒色、白色、褐色粒。E．内外面 - にぶい橙色。F．胴部中位～底部ほぼ遺存。胴部中位～頸部破片。G．土器棺の蓋。H．土器棺墓最上部。

7．遺構外検出遺物

遺構外出土の遺物としては、主に勝坂式終末期から加曽利ＥⅢ式期にかけての縄文土器が多く検出されている。また、石製品や少量の弥生土器、土師器、須恵器も検出されている他、１点のみであるが、近現代溝から中世瓦である永福寺系軒平瓦の小破片が検出されている。



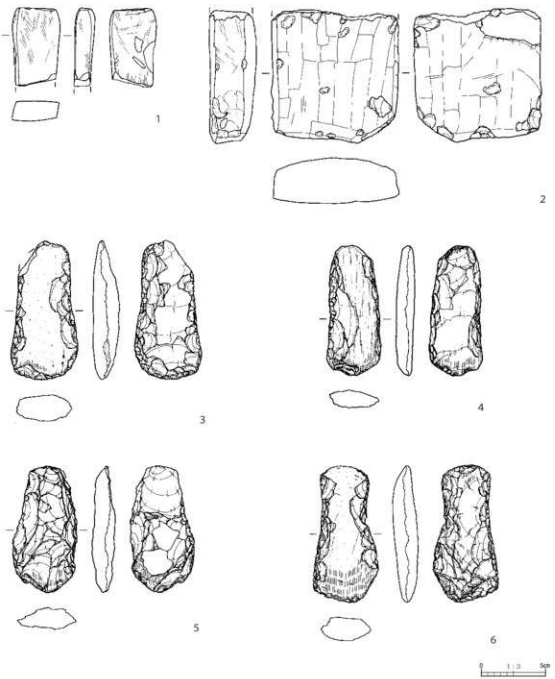
第42図　遺構外出土遺物図

第20表　遺構外出土遺物観察表

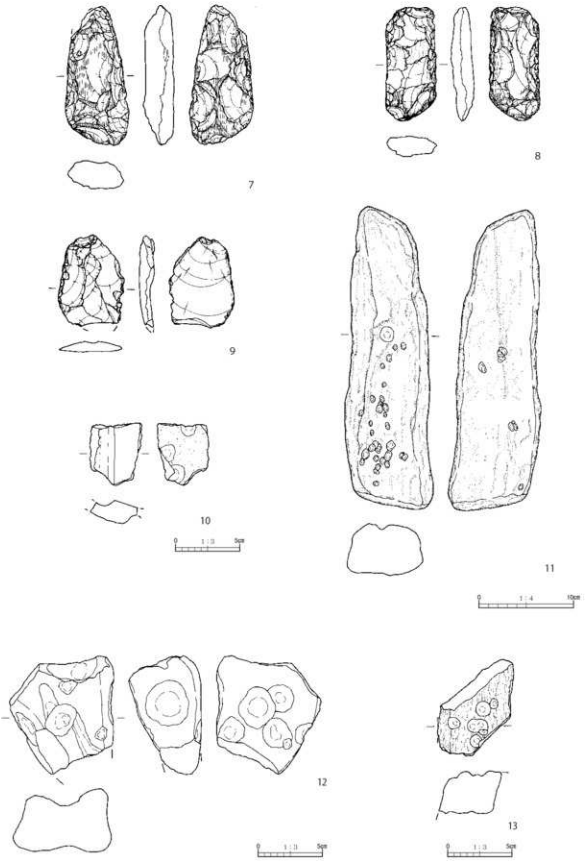
1	縄文土器 浅鉢	A．残存高7.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、平縁口縁。口唇部肥厚。隆帯による楕円形文様に横位隆帯を接続する。ミガキ。内面、ナデ。D．石英、白色粒、黒色粒。E．内面 - 明赤褐。外面 - にぶい赤褐。F．破片。H．１区調査区。
2	縄文土器 深鉢	A．残存高10.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面、平縁口縁。口縁部肥厚。単節ＬＲ縄文を横位施文。横位・斜位隆帯を貼付け。隆帯脇をナデ。内面、ナデ。D．白色粒、角閃石、チャート、礫。E．内外面 - にぶい黄橙。F．口縁部破片。H．２区一括。
3	縄文土器 浅鉢	A．残存高12.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面、平縁口縁。口縁部横位・斜位ナデ。口縁部下位に斜位隆帯を貼付け。隆帯両脇をナデ。地文に単節ＬＲ縄文を縦位施文。内面、ナデ。D．白色粒、雲母、角閃石、礫。E．内外面 - にぶい橙。F．口縁部破片。G．両耳壺か。H．MY 羽倉南。
4	軒平瓦	A．残存高5.6、顎部厚2.6。C．内外面、顎部ナデ。D．白色粒多。E．暗灰色。F．瓦当部一部。G．永福寺系唐草文軒平瓦。H．２区 SD-3(近現代溝)。

8．石製品

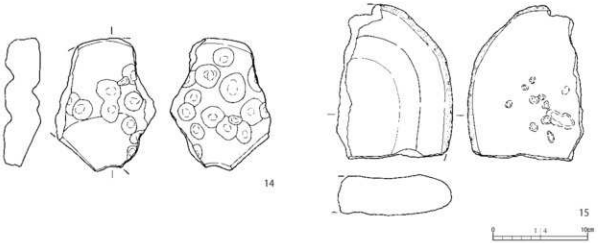
石製品としては、主に打製石斧、スクレイパー、砥石、台石、石皿、凹石、多孔石等が検出されている。多くは、近現代の道路及び溝跡からの検出や表採であるが、一部に遺構覆土中からの検出もある。遺構覆土中からの検出としては、第 1a・b 号住居跡より打製石斧（第 43 図 3）、第 7 号住居跡より打製石斧（第 43 図 4・5）、第 2b 号住居跡より多孔石（第 44 図 14）、第 6 号住居跡より石囲炉の一部であった台石（第 44 図 11）がある。なお、遺構に伴うと判断できるものは、第 6 号住居跡検出の台石のみである。



第 43 図　石製品実測図 1



第 44 図　石製品実測図 2



第 45 図　石製品実測図 3

第 21 表　石製品観察表

1	石器 砥石	長さ［6.2］、幅 3.8、厚さ 1.6、重さ 56.38g。石材：流紋岩。使用痕：表裏面・両側面に顕著な摩耗痕が認められる。部分的に擦痕あり。残存：下半部欠損。
2	石器 砥石	長さ［10.5］、幅 10.15、厚さ 3.7、重さ 619.4g。石材：流紋岩。調整：表裏面や両側面に敲状工具による削痕や敲打痕が認められる。使用痕：全体に弱い摩耗痕あり。残存：上半部欠損。
3	石器 打製石斧	長さ 11.03、幅 5.3、厚さ 2.1、重さ 150.66g。石材：砂岩。調整：割礫の両側縁部に直接打撃による両面加工。使用痕：刃部周辺に摩耗痕・敲打痕あり。残存：基部の一部欠損。備考：SI-1 出土。
4	石器 打製石斧	長さ 10.35、幅 4.24、厚さ 1.45、重さ 95.05g。石材：緑色岩類。調整：割礫の両側縁部に直接打撃による両面加工。使用痕：刃部・基部周辺に摩耗痕や微細剥離痕あり。残存：完形。備考：SI-7 出土。
5	石器 打製石斧	長さ 10.1、幅 5.08、厚さ 1.85、重さ 91.72g。石材：頁岩。調整：割礫の両側縁部に直接打撃による両面加工。使用痕：刃部周辺に摩耗痕や微細剥離痕あり。裏面の一部に欠損や熱破砕痕あり。残存：ほぼ完形。備考：SI-7 出土。
6	石器 打製石斧	長さ 10.9、幅 5.12、厚さ 2.0、重さ 119.06g。石材：チャート。調整：割礫の両側縁部に直接打撃による両面加工。使用痕：刃部周辺に摩耗痕や微細剥離痕あり。残存：完形。
7	石器 打製石斧	長さ 11.0、幅 5.05、厚さ 2.44、重さ 160.17g。石材：安山岩。調整：剥片の両側縁部に直接打撃による両面加工。使用痕：全体に摩耗痕や風化が顕著。残存：基部の一部欠損。
8	石器 打製石斧	長さ 9.0、幅 4.0、厚さ 1.8、重さ 91.56g。石材：砂岩。調整：割礫の両側縁部に直接打撃による両面加工が認められ、右側縁中央に敲打痕あり。使用痕：刃部周辺に摩耗痕あり。残存：一部欠損。
9	石器 スクレイパー	長さ［7.28］、幅 5.26、厚さ 1.2、重さ 41.59g。石材：頁岩。調整：礫皮をもつ薄型剥片の二側縁に直接打撃による片面加工。使用痕：刃部周辺に摩耗痕や微細剥離痕あり。残存：縁端部欠損。
10	石器 砥石	長さ［4.9］、幅［4.15］、厚さ［1.85］、重さ 31.85g。石材：砂岩。使用痕：表面中央に筋状の砥面が認められる。残存：小破片。備考：多孔石の破片を転用か。
11	石器 台石	長さ 32.1、幅 9.6、厚さ 5.4、重さ 2717.54g。石材：片岩。使用痕：表裏面に凹穴や敲打痕が認められる。裏面の一部に変色範囲あり。残存：完形。備考：SI-6 炉石。
12	石器 凹石	長さ［9.4］、幅 8.3、厚さ 5.8、重さ 342.08g。石材：砂岩。使用痕：表裏面・両側面中央に漏斗状の凹穴が認められる。残存：下部欠損。備考：多孔石の破片を転用か。
13	石器 多孔石	長さ［15.55］、幅［12.3］、厚さ［6.9］、重さ 1602.32g。石材：緑色岩類。使用痕：表面に凹穴が 7 穴認められる。残存：小破片。
14	石器 多孔石	長さ 14.1、幅［10.6］、厚さ 3.9、重さ 588.93g。石材：砂岩。使用痕：表裏面に多数の凹穴が認められる。残存：両側縁部欠損。備考：石皿の破片を転用か。備考：SI-2b 出土。
15	石器 石皿	長さ［16.4］、幅［12.4］、厚さ 4.3、重さ 1308.19g。石材：安山岩。使用痕：扁平礫の表面に摩耗痕が認められ、浅く窪んでいる。裏面の中央に敲打痕あり。残存：小破片。

第Ⅳ章　まとめ

本発掘調査では、縄文時代中期を主体とする住居跡を中心に、弥生時代、古墳時代、平安時代の住居跡のほか、古墳時代の土器棺墓、中世の瓦片等、多岐にわたる遺構・遺物が検出された。本章では、本調査における成果を概観し、課題を添えて、まとめとしたい。

（1）本発掘調査の成果について

〈縄文時代〉

本調査区で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡９軒（SI － 1a・b、2a ～ c、3、6、11a・b）、集石炉１基（SL － 1）、同時代の遺物は、勝坂式後半期から加曾利ＥⅡ・Ⅲ式期を中心とした土器である。遺構の検出状況は地形に由来する土砂の流失と近現代の開発に伴う削平の影響により悪く、各遺構の時期を特定することは困難なものも含まれた。ただ、各遺構から検出された土器が、縄文時代中期中葉から後葉にかけての時期を主体とすることから、本調査地点で検出された集落は、該期を中心に営まれたものと考えられる。

同時期の集落は、台地部の環状集落群に注目される傾向にあるが、山地から丘陵部にかけては、２～３軒程度の小規模集落も点在しており、本遺跡の周辺地形を鑑みれば、大規模集落への展開は困難であり、本集落もそういった集落の１つであったと推察される。

〈弥生時代・古墳時代〉

本調査で検出された弥生時代から古墳時代の遺構は、竪穴住居跡４軒（SI － 4・5・7・9）、土器棺墓１基（ST － 1）、同時代の遺物は、弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての吉ヶ谷式土器、及び土師器片である。

各遺構から検出される遺物は少なく、弥生時代後期末葉から古墳時代前期と推定される SI － 7、古墳時代中期と推定される ST － 1 を除き、遺構の切り合いや覆土の様相から時期を推察するに留まる。

弥生・古墳時代に関しては、北側に隣接する同時代の集落遺跡及び墓域を伴う前組羽根倉遺跡（前組遺跡発掘調査団 1986）との関係性が考慮されるが、住居跡については、この集落に含まれるか、または同時期の別集落の遺構であるかは、現在のところ、判然としない状況である。また、土器棺墓についても、類似した遺構や同時期と判断し得る土器が検出されていないため、同遺跡の墓域との関係性について課題が残る。

〈平安時代〉

本調査で検出された平安時代の遺構は、竪穴住居跡１軒（SI － 8）、同時代の遺物は、土師器、須恵器である。

弥生・古墳時代同様に、遺物の検出は少なく、遺構の検出も住居跡１軒のみであるため、集落の様相を想定することは難しいが、検出された須恵器 坏（第 25 図１）から、９世紀後半頃という年代が求められるため、該期の住居跡が周辺に分布している可能性がある。

同時期の丘陵部は、従来から営まれてきた小規模集落の他に、台地部の大規模集落の衰退の影響を受けて、新たな小規模集落が発生する時期であり、古墳時代の後、SI － 8 に先行する遺構・遺物が検出されていない様相から、本集落が新たに形成された小規模集落であった可能性が考慮される。

〈中世〉

本調査で検出された中世の遺構はなく、同時代の遺物は近現代の溝跡から検出された永福寺系軒平瓦の破片１点のみである。

本市において同系統の瓦は、鎌倉時代の児玉党等に関連する遺跡で主に検出される傾向にあり、真

鏡寺館跡、城ノ内遺跡、大久保山遺跡等で検出されている。今後、本遺跡周辺の調査が進む過程で近隣に同時代の遺構が検出されることが期待される。

（2）本発掘調査の課題について

〈古墳時代中期の土器棺墓について〉

古墳時代中期に比定される第１号土器棺墓は、先述の通り、隣接する墓域との関係性について課題が残る。確かに、女堀川上流域における土地利用の継承性（鈴木 2000）、古墳時代中期の丘陵部や集落後背地に墓域を占地する傾向を踏まえれば、埋葬地として適切である。しかしながら、土器棺墓に用いられた土器が本地域において異系統に属すること、隣接する墓域との連続性を示す遺構・遺物が検出されていないこと、同一墓制の遺構が検出されず系譜をたどることが困難なこと等、本遺構の同墓域における位置付けを検討することは難しい。

本市域においては、本遺構のような土器棺墓の検出事例は少なく、本遺跡のほか、旭・小島古墳群林８号墳外縁出土の土器棺墓３基（松本 2006）のみである。本事例は、明確に古墳群内に位置することや土器棺墓の設置方法、土器棺を構成する土器の差異等、異なる点が多く、本遺構と比較すること自体、やや困難なものではあるが、林８号墳例では、検出事例の少ない外来系土器の「伊予型」土器を伴うことが特徴として挙げられ（松本 2014）、在地集団と系譜を異にする集団ないし家族や個人が一定の同一墓域に埋葬されている可能性を想起させる。

本調査で検出された土器棺は頸部から口縁部が欠損し、その形態を明らかにし得ないが、想像を逞しくすれば、本遺構も林８号墳例と同様に、こういった外来系土器をもつ集団の影響を受けて発生した可能性を否定できない。

また、前組羽根倉遺跡において、弥生時代中期の墓域が同時代後期末葉から古墳時代前期にかけて墓域として再利用された事実を鑑みるならば、本遺跡周辺の丘陵頂部が墓域であるという認識の継承が一定期間維持されたことにより、異なる時代・墓制でありながらも、同一墓域に埋葬されるという結果が生じたと見做すこともできよう。

本遺構は、現状、本地域周辺において類例が少なく、十分な検討にたえる資料ではないが、今後の調査により、近隣で時間・物質的な空白を埋める方形周溝墓や古墳、土器棺墓が検出される可能性を考えつつ、今後の本地域における類例の増加や発掘調査の進展に期待し、今後の課題としたい。

以上、本遺跡で検出された遺構・遺物について時期毎に整理し、課題を提示した。本遺跡を含む周辺地域一帯の研究は、現本庄市になる旧児玉町時代より長らく進められており、優れた先行研究・発掘調査に支えられ、歴史的な景観の復元は順調に進められてきたと思われる。しかしながら、個別事象については、本件で示した課題のように、今後も更に検討を深めていく必要があるだろう。

本件は一発掘調査の整理・報告であり、簡潔な報告にとどめるが、本報告によって示した遺構・遺物が本庄市並び周辺地域一帯の歴史を読み解く一つの資料となっていくことを願う。

＜参考文献＞

本庄市遺跡調査会報告書

鈴木徳雄 2006『宮内上ノ原遺跡Ⅱ－Ｃ・Ｄ地点の調査－』第 20 集
恋河内昭彦 2009『真鏡寺後遺跡Ⅳ－Ｇ地点（真鏡寺館跡）の調査－』第 24 集
高橋清文他 2011『飯倉南部遺跡群』第 39 集
高橋清文編 2012『秋山西部遺跡群』第 43 集

本庄市埋蔵文化財調査報告書

恋河内昭彦 2006『金屋下別所遺跡Ｂ地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡Ｅ地点－県営中山間地域総合整備事業（秋平・阿久原地区）ほ場整備（篠の池下地区）に伴う発掘調査報告書－』第１集
松本完 2006『旭・小島古墳群－林地区Ⅰ－　小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅳ』第３集
太田博之 2007『西五十子古墳群　本庄総合公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』第５集
宮田忠洋 2008『宮内上ノ原遺跡Ⅲ－Ｅ地点の調査－　社会福祉法人武蔵野福祉会特別養護老人ホーム等建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』第 10 集
松本完 2002『久下前遺跡第３地点発掘調査報告書－市道 8501 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』第 25 集
恋河内昭彦 2013『金屋南遺跡Ⅲ－長沖古墳群内：縄文Ａ地区・江ノ浜地区－　児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書４』第 31 集
松本完 2013『久下前遺跡跡Ⅴ（Ｆ１地点）・久下東遺跡Ⅵ（Ｇ１地点）　本庄早稲田駅周辺土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書６』第 32 集
太田博之 2014『長沖古墳群Ⅹ Ⅲ－第 194・195・196・197・201 号墳の調査－　児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書５』第 39 集
宮本久子 2015『今井原屋敷遺跡－第５地点の調査－』第 46 集
恋河内昭彦 2018『久下前遺跡Ⅵ（C2・C3・C4・F2・F3 地点）　本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10』第 53 集

児玉町遺跡調査会報告書

恋河内昭彦 1995『南共和・新宮遺跡』第６・７集
鈴木徳雄他 2000『塩谷下大塚遺跡－Ｄ地点の調査－』第 10 集
恋河内昭彦 2000『天田遺跡－Ｂ地点の調査－』第 11 集
松澤浩一 2005『宮内上ノ原遺跡－Ｂ地点の調査－』第 18 集

児玉町文化財調査報告書

鈴木徳雄 1981『金屋遺跡群　児玉町第２次農業構造改善事業に伴う調査報告書』第２集
鈴木徳雄 1985『橋ノ入遺跡Ⅰ　児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書３』第５集
鈴木徳雄 1986『橋ノ入遺跡Ⅱ　児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書４』第６集
恋河内昭彦 1990『塩谷下大塚遺跡　児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書８』第 11 集
恋河内昭彦 1991『真鏡寺後遺跡Ⅲ－Ｃ・Ｄ・Ｅ地点の調査－』第 14 集
鈴木徳雄 1991『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』第 15 集
鈴木徳雄 1997『将監塚東・平塚・藤塚遺跡－縄文時代編－　町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 21』第 26 集

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団

石塚和則 1986『将監塚　縄文時代　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』第 63 集
井上茵明 1986『将軍塚・古井戸　古墳・歴史時代編Ⅰ　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』第 64 集
赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸　歴史時代編Ⅱ　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』第 71 集
宮井英一 1989『古井戸　縄文時代　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』第 75 集

その他

恋河内昭彦 1992「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
埼玉県教育委員会 1995『埼玉県埋蔵文化財調査年報　平成５年度』
埼玉県農林部森づくり課 2015『埼玉県地質図（山地・丘陵地）』
前組遺跡発掘調査団 1986『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』

写真図版

調査区 1 区北部（北から）

調査区 1 区南部（北東から）

写真図版２

調査区２区中央部（東から）

調査区２区西部（南東から）

第１a・b 号住居跡

第１a 号住居跡　炉跡

第１a 号住居跡ピット

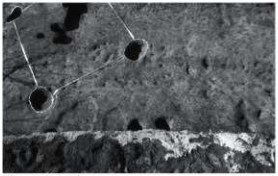
第１b 号住居跡ピット

第２a・b 号住居跡

第２b 号住居跡遺物出土状況１

第２b 号住居跡遺物出土状況２

第２b 号住居跡遺物出土状況３


第３号住居跡

第４・５・７・８・９号住居跡

第６号住居跡　炉跡１

第６号住居跡　炉跡２

第６号住居跡　埋甕

第７号住居跡

第７号住居跡遺物出土状況

第７号住居跡　炉跡

第９号住居跡

第 10 号住居跡

第 11a・b 号住居跡

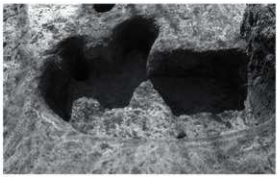
第１号掘立柱建物跡

第１号竪穴状遺構

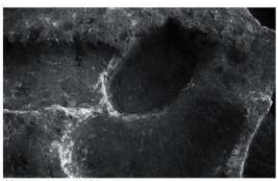
第１号竪穴状遺構遺物出土状況

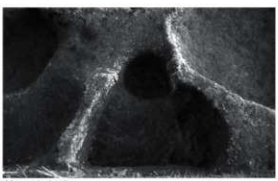
第１号土坑

第１号土坑遺物出土状況


第２号土坑

第５・６・７・８号土坑


第５・６号土坑

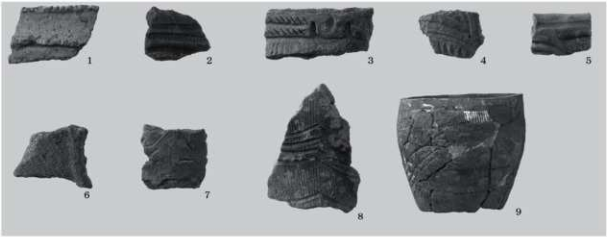

第７号土坑

第１号集石炉

第１号土器棺墓

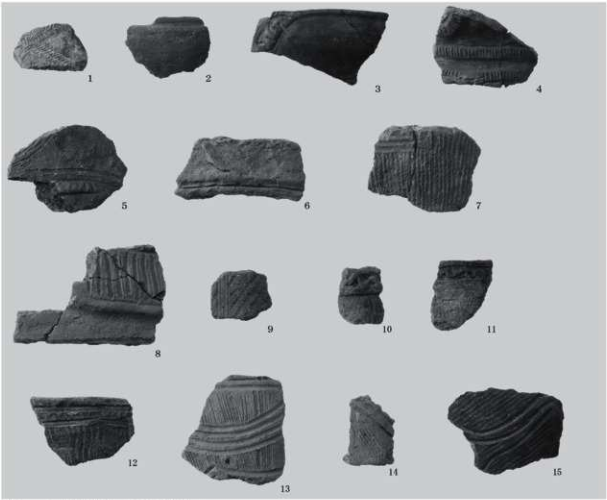
第１号土器棺墓　蓋部検出状況

第１号土器棺墓　棺身部検出状況



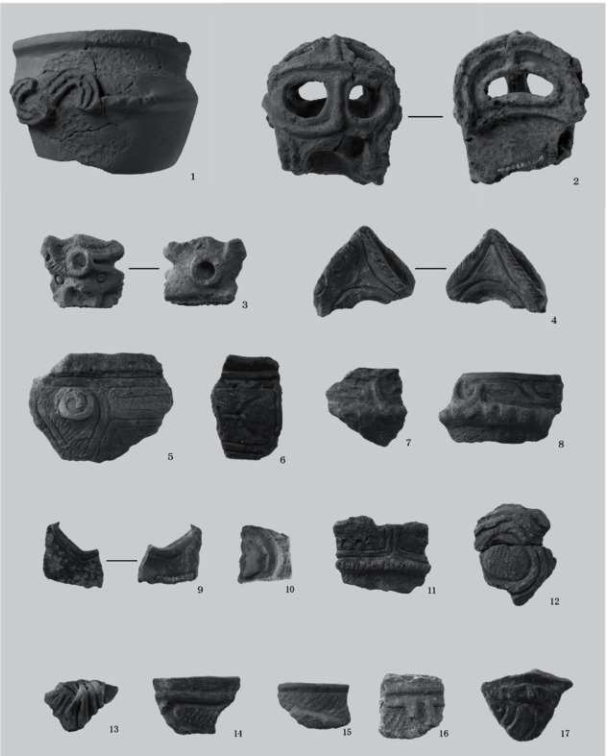
第１a 号住居跡出土遺物

第１b 号住居跡出土遺物



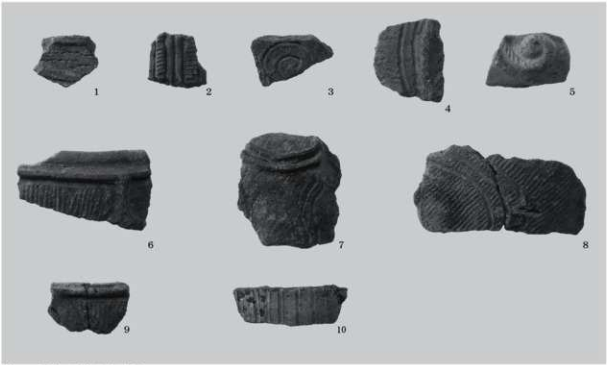
第１a・b 号住居跡一括出土遺物１

第１a・b 号住居跡一括出土遺物２



第２b 号住居跡出土遺物

※1：S=1／4

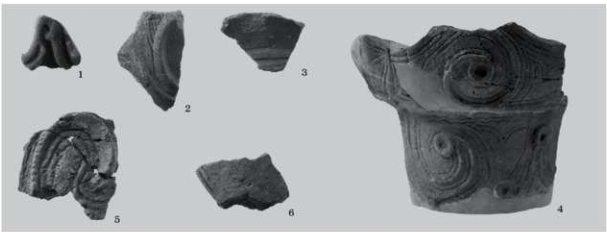


第２ｃ号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土遺物

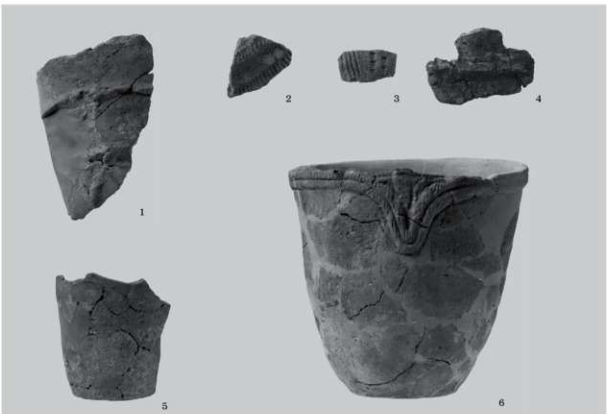
※１：Ｓ＝１／４

第 5 号住居跡出土遺物



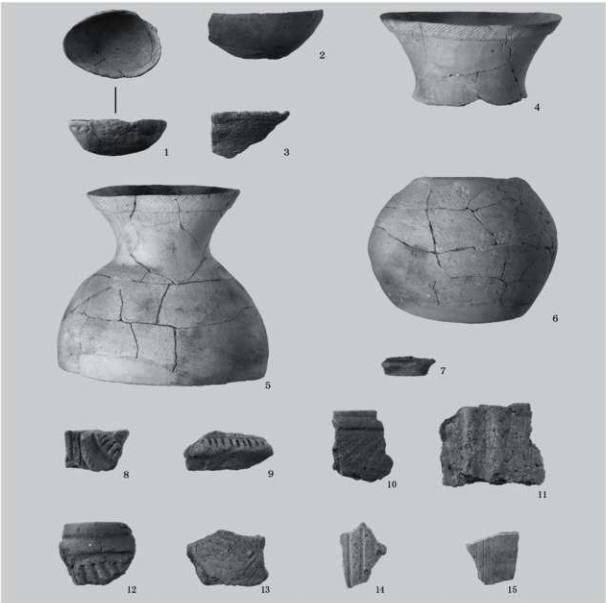
※4：S＝1／4

第 6 号住居跡・炉跡出土遺物



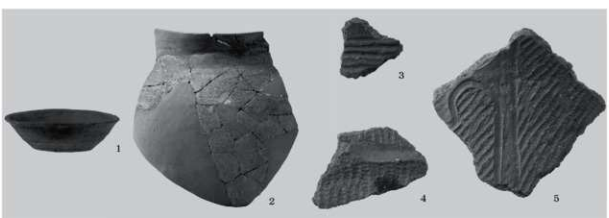
※5・6：S＝1／4

第 6 号住居跡埋甕出土遺物



第 7 号住居跡出土遺物

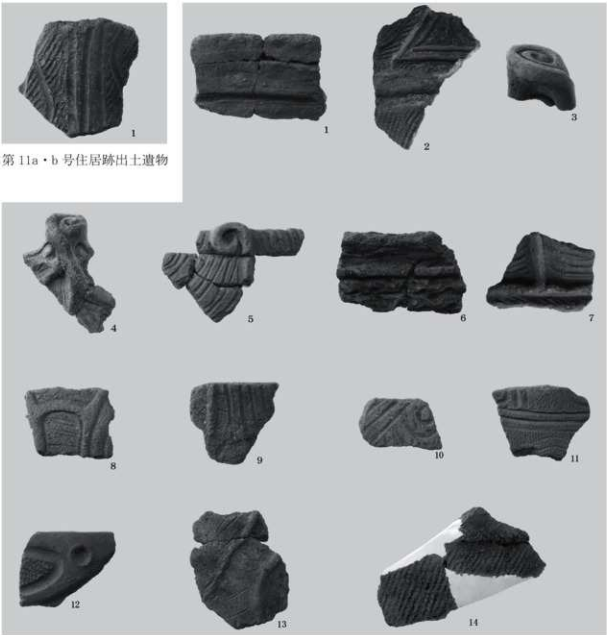
※1～7：S=1／4



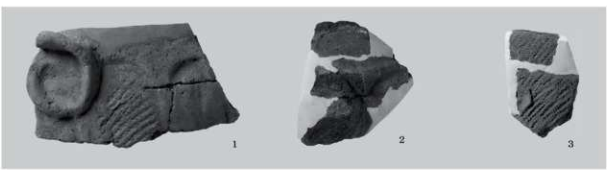
第 8 号住居跡出土遺物

※1・2：S=1／4

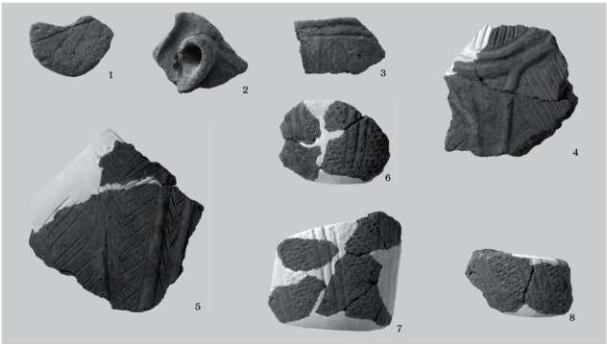
第 11a・b 号住居跡出土遺物



第 1 号掘立柱建物跡出土遺物



第 1 号竪穴状遺構出土遺物

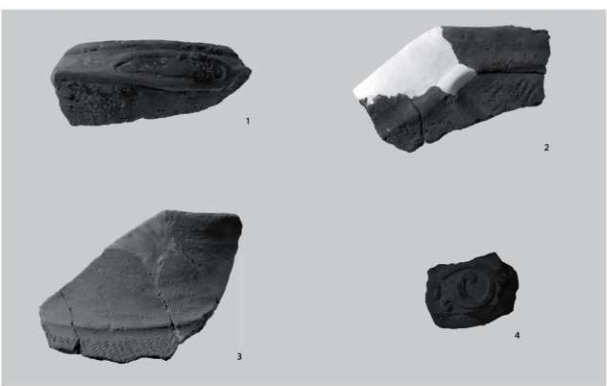


第 1 号土坑出土遺物

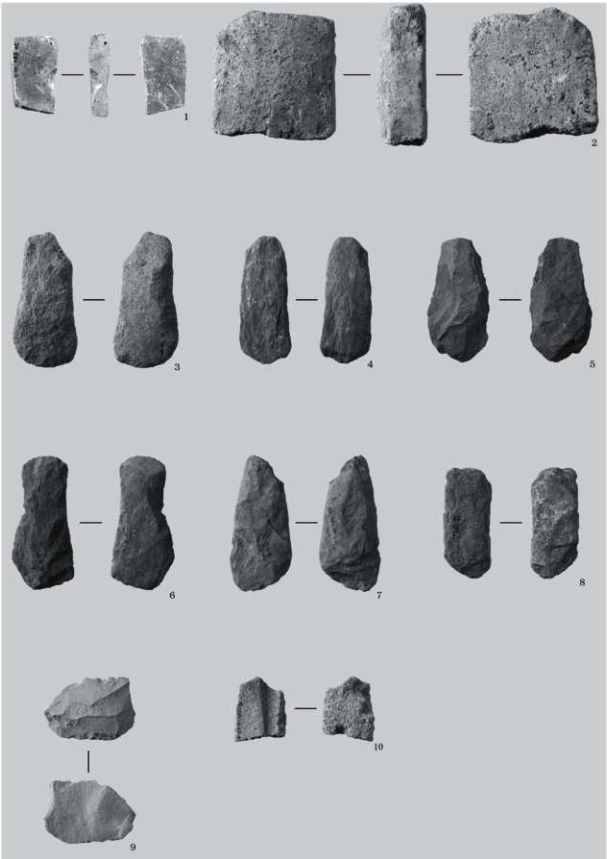
第 3 号土坑出土遺物

第 7 号土坑出土遺物

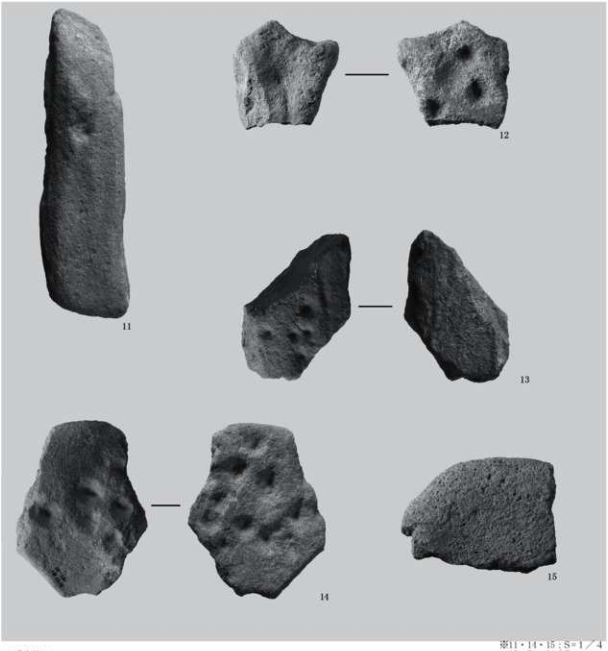
第１号土器棺墓出土遺物　※１・２：S＝1／5



遺構外出土遺物



石製品 1



※11・14・15：S＝1／4
13：S＝1／6

石製品 2

報告書抄録

フリガナ	ハネクラミナミイセキ		
書名	羽根倉南遺跡		
副書名			
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第 67 集
編著者	大熊季広・福岡佑斗		
編集機関	本庄市教育委員会		
所在地	〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄三丁目 5 番 3 号 TEL 0495-25-1185		
発行日	西暦 2022 年（令和4年）3月 31 日		

フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡	（度分秒）	（度分秒）			
ハネクラミナミイセキ 羽根倉南遺跡	ホンジョシモヒトマチミヤウチ 本庄市児玉町宮内字上ノ原 1287	112119	54-280	36° 11′ 18″	139° 05′ 24″	19931117 ～ 19940131	377.23 ㎡	町道改良

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡 15 軒・掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構1基・集石炉1基、ピット2基、土坑9基・土器棺墓1基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器	

本庄市埋蔵文化財調査報告書第 67 集

羽根倉南遺跡

令和 4 年 3 月 29 日　印刷
令和 4 年 3 月 29 日　発行

発行／本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号
印刷／山進社印刷株式会社
埼玉県本庄市本庄 3 丁目 3 番 36 号